世界ガールズ・レポート2024

PLAN INTERNATIONAL

Until we are all equal



それでも私たちは夢をみる

紛争下で生きる女の子とユース

世界ガールズ・レポート2024

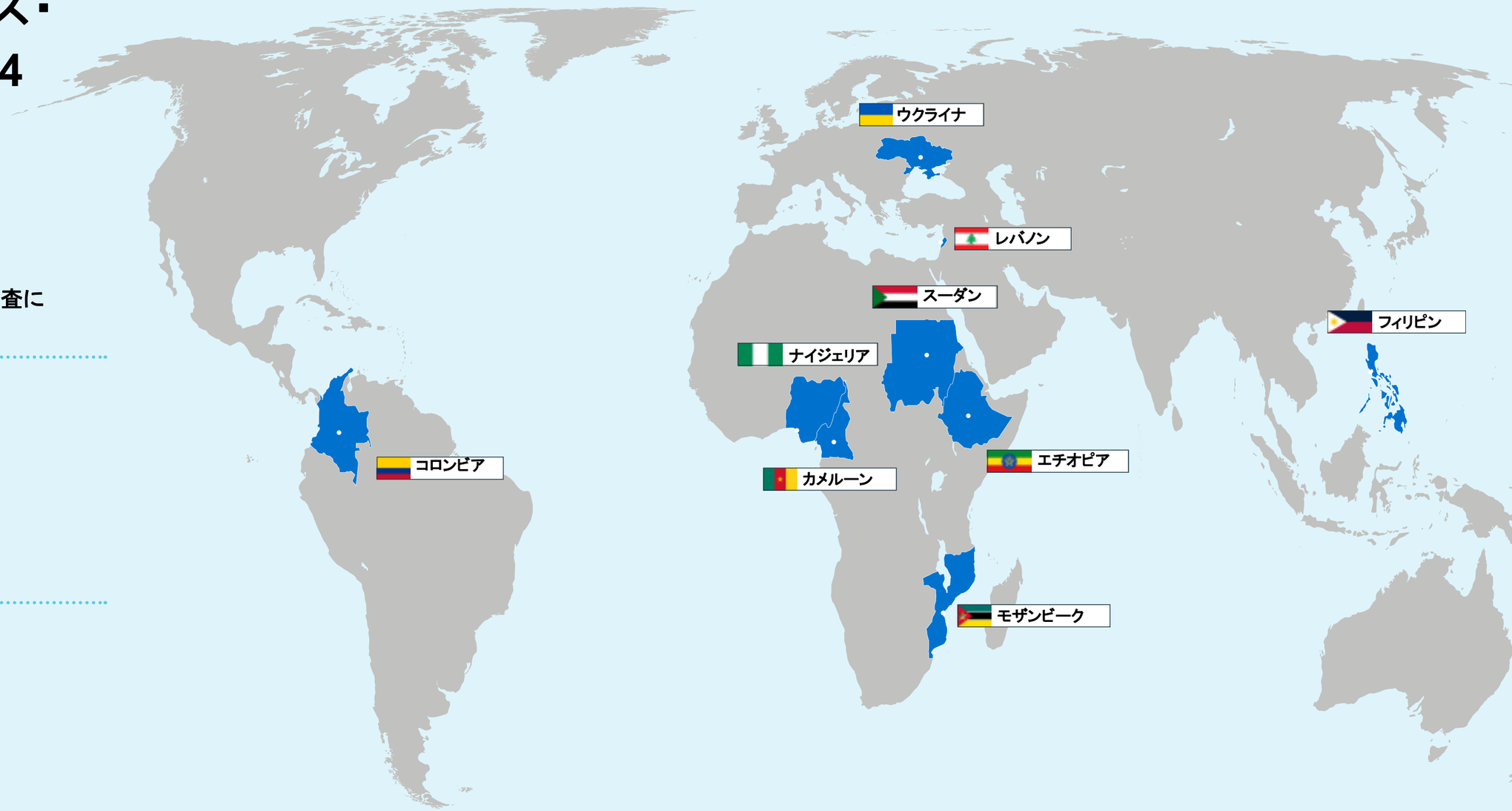
1万人超
の子どもとユースが本調査に参加した

10カ国における調査の参加者: **9,995人***

104人
への詳細なインタビュー

プラン・インターナショナルは2007年に「世界ガールズ・レポート」を初めて発表した。今年の報告書では、生活が紛争に支配されている世界10ヵ国の女の子、男の子、ユース女性、ユース男性の経験を調査した。

本調査には1万人超が参加した。10カ国*の9,995人の参加者を対象とした大規模な調査と、エチオピア、カメルーン、コロンビア、フィリピンから更に104人を集めた詳細なインタビューが実施された。



* 調査対象国のうち1カ国は、政治的その他の配慮により国名の公表を控える

表紙写真: モザンビークの紛争で避難生活を送る、妊娠中の14歳の女の子 © Plan International

免責事項

プラン・インターナショナルは、子どもの権利とジェンダー平等を推進する独立した開発・人道支援団体である。私たちは紛争に対して中立的立場を貫いている。紛争への関与は、女の子、子ども、ユースに対して有益な貢献ができるようにするためである。

内容に関する警告

本調査の参加者が語った経験談、特にインタビュー回答者の経験談には、身体的・性暴力に関する言及や、その他のデリケートで不快感を伴う可能性のある内容が含まれている。ご自身の判断で慎重にお読みいただきたい。

本地図について

この地図に表示されている境界線や名称、使用されている呼称は、プラン・インターナショナルによる公式な支持や承認を意味するものではない。

調査対象国

カメルーン

カメルーンの北西地域と南西地域における数十年来続く紛争の根源は「アングロフォン・クライシス（英語圏の危機）」として知られている。同地域における英語話者の疎外に対する弁護士や教師による平和的な抗議の後に、2016年に紛争は激化した。

事態は分離独立を要求する非国家武装集団(NSAG)と政府軍との本格的な戦闘へと発展した。現在では暴力、人権侵害、避難、誘拐、人道的危機などが長期化し、政府治安部隊とNSAGの両方が、超法規的処刑、拷問、民間人への攻撃を含む残虐行為の実行で厳しく非難されている。

2024年5月現在、180万人が支援を必要とし、58万3,112人が国内避難民(IDP)となり、6万6,178人のカメルーン難民がナイジェリアにいる[1]。プラン・インターナショナルとノルウェー難民評議会は、カメルーン北西部と南西の紛争を、暴力とその影響の深刻さにもかかわらず、世界で最も見過ごされている避難民危機の一つであるとみなしている[2、3]。

コロンビア

紛争は1960年代から続いている。当初は、土地の不平等な分配と政治参加の場の欠如が暴力と武力闘争を引き起こした。その後、麻薬密売、麻薬テロ、革命闘争の文脈における新たな政治的武装勢力の登場により、紛争は更に激化した。

コロンビアの紛争の特徴は、多数の武装集団が関与していることだ。国連人道問題調整事務所(OCHA)によると、2023年下半期には、NSAGが人道回廊の支配や戦略的地域の非合法経済から得られる利益に関心を示したことにより、特に7月と11月に紛争の犠牲者の数が大幅に増加した。国内の様々な地域におけるNSAGの拡大は、継続的な戦闘、領地内での対立、脅迫、殺人、避難、監禁などで地域コミュニティに影響を及ぼし、多くの人びとの一体性を危険にさらすという特徴がみられた。国北西部の地域とともに、太平洋沿岸地域、プトゥマヨ、ラ・ガヒラ、セサール、アラウカ、ヒラ、カケタ、アマゾナスなどの県が最も大きな影響を受けた[4]。

エチオピア

エチオピア北部の紛争は、ティグレ紛争とも呼ばれるが、ティグレ州以外にも広がり、アムハラ州やアファール州にも大きな影響を与えている。

オスロ国際平和研究所（Oslo Peace Research Institute）によると、2020～2022年の紛争により、10万人超の命が奪われた[5]。それは、直接的な暴力、医療システムの崩壊、深刻な飢餓が複合的に重なった結果である。エチオピア全土で2,100万人超が緊急支援を必要としており、その中には450万人のIDPも含まれる[6]。

2023年7月に発表された調査では、調査対象の女性と女の子のほぼ10%が性暴力、主にレイプを経験しており、30%が身体的暴力を経験していることが分かった[7]。和平合意は2022年11月に締結されたが、それから1年も経たないうちに同国南部で新たな紛争が勃発し、同国の安定と政府の安定が更に脅かされることとなった[8]。

レバノン

1975～1990年まで続いた内戦により、15万人超が命を落とし、80万人超が家を追われ、インフラに数十億ドルの損害が生じ、国は苦境に立たされた[9]。

近年、同国は継続的な政治・経済危機に陥り、更に国民一人当たりの難民人口(シリア人とパレスチナ人)が最も多い国となり、その合計は約175万人に達し、国の公共サービスを疲弊させた。

2023年10月7日以降、南部国境での紛争は更に激化し、10万2,523人がIDPとなり、120人の民間人(うち20人は子ども)が死亡した[10]。

加えて、給水所、学校、医療施設などの必須サービスも甚大な被害を受け、75%の子どもが貧困のリスクに瀕している[11]。

モザンビーク

内戦は1977～1992年まで続き、モザンビーク包括和平協定で終結したが、2013年に、元反政府武装勢力と現政権軍との間で再び低強度紛争が始まった。

2019年8月に調印された、平和と国民和解のためのマプト合意により、紛争は公式に終結した。だが、2017年以降、モザンビーク最北の州であるカボ・デルガードは、別のNSAGとモザンビーク治安部隊、そしてルワンダと南部アフリカ開発共同体の支援を受けた武装集団との間で、新たな武力紛争に巻き込まれている。この紛争は、民間人の頻繁な虐殺や、子どもの強制徴用など、残虐性の高さが極めて特徴的である[12]。2024年5月31日時点で、58万2,762人が避難を余儀なくされている[13]。避難を複数回した人もおり、多くの人が殺人、性的暴行、誘拐、恐喝、家屋や村の焼き討ちなど、恐ろしい暴力行為の被害や目撃者となっている[14]。

ナイジェリア

ナイジェリアにおける社会・経済的な対立は、しばしば民族間や宗教間の緊張を煽る要因となっている。過去30年以上にわたり、ナイジェリア北部ではしばしば暴力事件から都市暴動に発展するケースが複数回発生している。これらの対立は主に、過激派宗教グループとより広範なコミュニティとの衝突、そして一部の州では異なる民族グループ間の衝突として発生している。2020年以降、ナイジェリアの治安情勢は、テロと組織的ギャングの二重の脅威により、悪化の一途をたどっている。

OCHAによれば、ナイジェリアでは830万が人道支援を必要とし、220万人がIDPとなっており、深刻な人道危機に直面している[15]。ナイジェリアは世界で妊産婦死亡率が最も高い国のひとつであり、早すぎる結婚の割合も高い。国や州の関連法の施行が不十分であることが、こうした状況を悪化させている[16]。

スーダン

2024年4月15日、スーダンの残忍な紛争は1年を迎えた。1万6,000人超が死亡し、1,280万人超が家を追われ、その多くは近隣諸国に避難した[17、18]。

第二次内戦(2003~2020年)では、17万8,000~46万2,000人が死亡したと推定されており、その80%が病気と栄養不良によるものである。民族浄化を目的に、組織的なレイプ作戦が紛争の手段として展開された。

現在の紛争も、女性や子どもに不平等な影響を与えており、レイプ、強制結婚、性的奴隷、人身取引などの疑いがある。同国では1,400万人超の子どもが人道支援を必要としており、400万人近くの子どもが避難民となっていて、世界最大の子どもの避難民危機に直面している[19]。2024年8月1日、IPCの飢饉審査委員会は、ザムザム・キャンプを含む北ダルフールの一部地域で飢饉が発生していることを確認した。ザムザム・キャンプは、推定50万人が暮らすスーダン最大の避難民キャンプの一つである。

フィリピン

フィリピン南部における政府とモロ反政府武装勢力(モロ民族解放戦線(MNLF)およびモロ・イスラム解放戦線(MILF))との間の武力紛争は30年以上続き、12万人以上の死者を出している。両グループは当初、フィリピン南部のイスラム教徒が多数を占める地域での独立国家樹立を要求しており、MILFはイスラム国家の樹立を提唱していた。

1976年以降、様々な和平への取り組みがなされてきたが、歴史的な不平等問題、人口動態の変化、9.11以降のアルカイダやISとつながりのある過激派グループの台頭により、恒久的な平和の実現は依然困難な状況にある[20]。この紛争により社会構造が混乱し、特に女性や子どもが人身取引や性的搾取、虐待に遭いやすくなっている[21]。

ウクライナ

ウクライナでの紛争は、2014年にロシアによるクリミア併合から始まった。2022年2月には、ロシアがウクライナ全土に更なる攻撃を仕掛けて、紛争は激化した。2024年には、国連は少なくとも300万人の子どもを含む1,760万人が人道支援を必要としていると推定している[22]。ウクライナ国内には約500万人のIDPがおり、600万人超のウクライナ難民が今もヨーロッパに滞在している[23]。

プラン・インターナショナルのパートナーは、ジェンダーに基づく暴力の急増を警告しており、プラン・インターナショナルの調査では、国内の思春期の女の子と男の子が、常に危険に置かれている環境に深い影響を受け、精神的なストレスを抱えていることが明らかになった。また、避難を余儀なくされた15～19歳のウクライナ人の女の子は孤立感を感じ、紛争で破壊された以前の生活への強い恋しさを抱いていた[24]。3,798棟の教育施設が被害を受け、365棟が完全に破壊され、2,300校余りが安全上の理由で閉鎖されたままとなっており、ウクライナの多くのユースにとって、オンライン教育が唯一の選択肢となっている[25]。

2024年8月の報告書最終確定時点で、情報は全て確認済である。



子どもに優しいスペースに通う女の子、エチオピア

* 本報告書での子どもとユースの名前は匿名性を保つために変えられている。本報告書で使われる写真は調査参加者の写真ではない

要約

2024年の「世界ガールズ・レポート」は、生活が紛争に支配されているユースの経験に焦点を当てている。

私たちは、紛争によって引き起こされる暴力、教育の中断、生計手段の喪失、精神的苦痛といった経験が、女の子とユース女性、男の子とユース男性の間でどう異なるのか、そしてそれが将来の生活にどう影響するのかを理解したいと考えた。その違いが、人道支援団体、政府、政策立案者、コミュニティ、そしてユース自身にどのような意味を持つのだろうか。さらに、その知見を実際の活動に反映させるには、何が必要だろうか。本調査は、カメルーン、コロンビア、エチオピア、レバノン、モザンビーク、ナイジェリア、スーダン、ウクライナ、フィリピン、および政治的・運営上の機微により国名を公表できない10ヵ国から9,995人の参加者を対象に大規模な調査を実施した。更にエチオピア、カメルーン、コロンビア、フィリピンから104人が詳細なインタビューに参加した。紛争はすべての人に影響を及ぼすが、その影響は人によって異なる。本報告書では、紛争のジェンダー的側面について考察し、特に紛争時や平和で豊かな時代において見過ごされがちな女の子とユース女性のニーズと権利に焦点を当てる。

> **「紛争の影響については、男性も女性も平等に影響を受けたと言えますが、女性はレイプされるという点で深刻です。男の子も紛争の影響をかなり受けました。多くの男の子が殺され、紛争後も行方不明のままの子もいます。ですから、誰もが異なる形で紛争の影響を受けたと言えます」**
> Addodas、19歳、エチオピア

2024年、約3億人が人道支援を必要としている[26]。紛争は、人道支援を実施する主な要因の一つだ。民間人、特に子どもやユースは、壊滅的な影響を受けている。彼らは徴兵され、誘拐され、学校や病院で襲撃され、性暴力を受け、人道的なアクセスを拒否され続けている。私たちの調査が示すように、このような壊滅的な状況下で、女の子と男の子、ユース女性とユース男性により、紛争の経験が異なることが、今回の調査と詳細なインタビューの両方から明らかにされた。この違いが本報告書の主な焦点となっている。

本調査から明らかにされたのは、効果的な支援を行うためには、紛争ごとに異なる背景やアイデンティティによって、それぞれの経験は多種多様であると認識する重要性だ。恐怖は共通の話題であり、生活必需品をめぐる困難も同様であるが、女の子とユース女性とは、非常に高いレベルの精神的ストレスを訴えている。

彼女たちは性的暴行を受け、家事や妊娠により、行動の自由が更に制限されている。男の子とユース男性は戦闘に駆り出され、多くが命を落とし、一家の大黒柱や守り手としての責任を感じている。

質的インタビューでは、インタビュー回答者の多くが、誰であっても、どこであっても、常に残忍な行為やトラウマを抱えたり目撃したりしていることが示されている。

生活は破壊され、コミュニティや家族は崩壊した。調査と詳細なインタビューの両方から、紛争の経験には明確なジェンダー的違いが認められてはいるものの、皆が一様に苦しんでいることが明らかになった。

主な調査結果



ユースは、睡眠障害(55%*)や慢性的な不安(54%)など、高いレベルの精神的苦痛を訴えており、
女の子とユース女性は、これらの精神的ストレスの度合いが、男の子とユース男性と比べて有意**に高い。



調査では、**女の子とユース女性の27%**が、

「性とジェンダーに基づく暴力(SGBV)が日常で常に存在するリスクである」と報告しており、インタビューに応じた女の子とユース女性も同様であった。

特にエチオピアのインタビュー回答者は、女の子とユース女性に対する残虐な性暴力を目撃・経験しており、**「精神的なケアを含む安全と支援が緊急に必要である」と強調した。レイプによって妊娠した女の子とユース女性は、「自宅に戻れば差別的な扱いを受ける」と報告している。**

38%の回答者が、
「危ない」、または「非常に危ない」と感じている

と報告し、女の子とユース女性(39%)は、男の子とユース男性(36%)に比べて、より危険を感じていた。



調査回答者の半数超が、紛争が原因で**教育を受けることができなかった。**
その割合は、男の子とユース男性(53%)が女の子とユース女性(52%)をわずかに上回っている。



男の子とユース男性は、武装集団から女の子とユース女性よりも**勧誘の対象とされており、**その割合は22%対14%である。17歳以下の調査回答者の約17%が、武装集団への所属・支援を求められた経験がある。



45%超の回答者 が摂取する食事の量が減少していると報告しており、女の子とユース女性の場合は47%、男の子とユース男性の場合は44%だった。また、女の子とユース女性は「食料支援へのアクセスが極めて困難」と報告している。59%の回答者は電気へのアクセスが限られている、または全くなく、41%は水へのアクセスが限られているか、全くなかった。



63%の回答者は、自身の性自認に拘わらず、自国の**紛争により生計が何らかの影響を受けた。**調査全体を通して、財政支援と経済再建への支援が重要な優先事項として浮上した。



65%のユースが**和平協議**と、その協議に彼ら自身も参加することを望んでいる。
女の子の方が男の子よりもユースの参加に支持を示し、ユース女性の45%がユースの参加を支持し、39%が特に女の子とユース女性の参加を望んでいる。

* 割合は、小数点以下を切り捨てて、最も近い整数に修正されている。中間点は維持されている
** 本報告書では、「有意」という用語は統計的な意味で使用されている、偶然に起因しない結果を指す

行動への呼びかけ

社会が紛争から立ち直り、ユースが紛争を生き抜く中で、彼らは多くを提供する立場になることができる。

ユースが直面する複雑な課題を乗り越えていくために、彼らの声に耳を傾けることが重要だ。

ユースは皆、経済的・教育的な支援を必要とし、生活必需品だけでなく、特に紛争中・紛争後の性と生殖に関する健康と権利(SRHR)、心理社会的支援に関して、彼らの状況に合わせたサービスへのアクセスも必要としている。

紛争は一世代全体を蝕む可能性があるが、ユースが適切に支援されれば、この世代の経験とエネルギーがコミュニティの存続と再建の一助になる。



「質の高い教育、手厚い支援、そして何より心理的保護を彼らに提供してください」。
Martha、22歳、コロンビア

「ユースは未来を築く存在であり、和平交渉に関与すべきです」。
Akungha、24歳、カメルーン

絶望的な現状にもかかわらず、未来への希望はまだ残っており、調査に参加したユースは、紛争を生き延び、その後に再建する方法について多くのアイデアを持っている。

女の子とユースは、国際団体と国・地方政府、人道支援機関、ドナーが協力し、右記を達成することを求める。

- **即時停戦を実施し、**女の子とユースの声や具体的なニーズを反映させる形で、恒久的な平和を目的とした**有意義な和平交渉を開始すること。**
- **紛争下の子どもに対する重大な侵害行為を全て止め、糾弾すること。**
  これには、軍隊や武装集団による徴用や利用、殺傷、性暴力、学校や病院への襲撃、誘拐、人道支援へのアクセス遮断などが含まれる。
- **子どもやユースへの安全で包摂的な教育を支援すること。**
  これには、平和教育、安全な学校宣言の実施のための資金援助、代替的な教育の提供などが含まれる。
- **人道支援に重点を置き、**女の子、男の子、ユースが平等に食料、水、避難所を利用できるようにし、女の子やユース女性対象のものも含め、暴力のサバイバーのためのサービスを優先すること。
- **地域経済を支え、**女の子、男の子、ユースの各々のニーズを認識した上で、**雇用機会を提供し、**彼らが各々のニーズに合った選択ができるようにすること。

目次

世界ガールズ・レポート2024 2
- 調査対象国 4

要約 7
- 主な調査結果 8
- 行動への呼びかけ 9

序文 10
- ガザ 12

はじめに 14

調査方法 16

私たちが学んだこと 18
- 紛争による全体的な影響 20
- 危険を感じる:日常生活における暴力の経験 26
- 武装集団の脅威 30
- 教育: 戦争の犠牲 33
- 健康と幸福 37
- 生計と経済的安定 41
- サービスとリソースへのアクセス 43
- 援助機関の役割 45
- 将来を見据えて 47

結論 52

提言 56

注釈 62

謝辞 66

序文

医師Elzahra Mohammedはハルツームで生まれ、5歳の時にダルフールに移住した。彼女は内戦が激化していた1996年もハルツームで過ごし、それ以来、彼女の生活は紛争の影響を受け続けている。それでも両親の応援を受け、彼女は医師の資格を取得した。

2023年に戦闘が再開されると、彼女は3人の子どもを含む家族とともに国内のより安全な地域へ、そして最終的にはエジプトへと避難した。現在、Elzahraはスーダンでプラン・インターナショナルの職員として働き、両国を行き来している。

私は、子どものときも、大人になってからも、ずっと紛争と隣り合わせの生活を送ってきました。幼少期は理想的なものでした。庭やマンゴーの木があり、安全で平和な環境で、幼い女の子でも安心して遊べる場所がありました。私たちは生活を本当に楽しんでいましたが、突然全てが変わりました。

戦闘が私たちの住んでいる近くにまできたとき、私たちは「一人で外出してはならない。誰かが見つけて殺したり、レイプするかもしれない」と告げられました。食料は不足し、高価になり、学校は閉鎖され、IDPキャンプとなってしまいました。

「平和を築くためには、女の子やユース女性に目を向ける必要があることは明らかです」

私たちは屋外の木陰で勉強しました。勉強中に銃声が聞こえ、人びとが走り回り、軍用機が飛び回るのを見聞きすることもありました。軍用機の音は、子どもだった私たちにはとても恐ろしいものでした。

全てが変わってしまったのです。家族を失いました。従兄のことを覚えています。本当に大好きでした。彼は殺されたのです。一日中血を流して。自分の親戚のそんな話を聞くと、本当に心が痛みます。私たちは病院の近くに住んでいました。毎日、死んだ人や負傷した人を目にしました。紛争は恐ろしいですが、特に女の子にとっては極めて恐ろしいと思います。紛争以前から、女の子はある種の差別を受けていましたが、紛争勃発後は、男の子がナイフを携帯するようになり、状況はさらに悪化しました。

嫌がらせに遭ったとしても、ナイフを持っているかもしれないので何も言えません。攻撃されるかもしれません。私は試験で州で1位になり、そのお祝いの式典に出るために外出したとき、男の子10人ほどが私を攻撃しようとしました。「お前は女の子だ。どうして1位になれたんだ?」と。私は子どもの頃にこれら全てを目にし、その経験からトラウマを抱えました。

私は医師になり、紛争で虐待を受け妊娠した女の子とユース女性を多く診ました。ある女の子が路上で赤ちゃんを出産するのを目撃したこともあります。私たちは彼女を助け、彼女は娘のひとりに私の名前から「Zahra」と名付けました。私は女の子たちが経験していることがわかります。女の子は男の子と同じように影響を受けるのではないことを認識することが重要で、異なる方法で対応する必要があります。彼女たちは、実質的にも感情的にも異なるニーズを持っているのです。だからこそ、私は支援しようとしているのです。私はレイプのサバイバーを支援するための訓練を受けました。IDPキャンプで活動していると、女の子が危険を冒して、本来ならしないような仕事をさせられているのを目にします。女性や女の子は、必ずしも直接攻撃の対象となるわけではありませんが、彼女たちは紛争の影響を実感しています。至る所で、女の子が食料を求めて苦労し、家族を支えるために仕事をし、彼女自身のニーズが無視されているのを目にします。

私は人びとの違いを認識し、状況を明確に把握することが重要であるとの思いから、本報告書を歓迎します。人びとを適切に支援するためには、彼らが経験していることを正確に理解しなければなりません。紛争を経験した人びとは、皆トラウマを経験しますが、その形は様々です。

スーダンで働く医師として、このような活動ができることに感謝しています。私の国では悲しみや苦しみが多いですが、希望もあります。状況が変化することを信じなければなりません。

— Elzahra Mohammed医師



スーダンの難民キャンプに設置された緊急用テント© Plan International

Fatima*（23歳）は、ずっとガザで暮らしてきた。2023年10月に家を追われ、現在は家族7人で東ガザの小さなアパートに暮らし、そこを別の家族と共有している。彼女は、プラン・インターナショナルのユース大使として活動しており、現在の紛争では、ユースの声が確実に聞き入れられるよう、尽力している。

現在も続く深刻な暴力のため、ガザでは本報告書のための調査を行うことはできなかったが、Fatimaやその家族、そして何千人ものパレスチナの人びとが、飢え、恐怖、死、破壊と日々隣り合わせで生きている。彼らの声が沈黙させられてはならない。Fatimaの証言は、世界中の紛争下の多くのユースの経験を物語っており、正義に基づく平和の圧倒的な重要性を強調している。

* 本名ではない

ガザ地区での生活は、私に人生について深く、そしてしばしば挑戦的な見解を与えてくれました。紛争地域で育つということは、日々不確実性や限界と向き合うことを意味します。より安定した地域に住む同年代の人の生活と私の生活との間の乖離は、機会や生活環境における深刻な違いを露わにしています。紛争が絶えず存在していることで、私たちの夢や希望の前に大きな障壁が立ちはだかり、旅行のような単純な望みさえも、困難で時に屈辱的なものにしてしまいます。これは私に一つの疑問を抱かせます。「私たちは彼らと同じ人間ではないのか?」そしてその答えは?… 答えはありません。紛争地域に住むということは、ユースに生涯消えない影響を及ぼすのです。質の高い教育、雇用機会、安全な環境へのアクセスを制限します。多くの人が暴力を目撃したり、愛する人を失ったりして、トラウマを抱え、長期的な精神的影響を及ぼし得ます。更に、経済の崩壊とインフラの欠如により、ユースは安定した将来を思い描いたり、普通の生活を想像することが困難になっています。

「私たちは彼らと同じ人間ではないのか?」

日々の負担は、家族や幼い子どもの世話をし、基本的な必需品を苦労して入手することを常に心配し、彼らの安全を守らなければならない女性と女の子にとって、多くの点で過酷です。ですが、食料を求めて命を懸けるのは、多くの場合、男の子や男性です。皆が苦しんでいますが、こうした厳しい現実に対処するために、ユースたちは生き抜くために様々な戦略を採用しているのです。一日一日を生き、ささやかな喜びや個人的な情熱に慰めを見出しています。自分だけの世界を作り、好きな活動に打ち込むことで、一時的な逃避と平時の感覚を味わいます。私は写真を撮ったり詩を書いたりします。写真家になりたいと思っています。希望と夢を抱くことは、生き延びるために極めて重要なことです。厳しい状況にあっても、こうした夢が、将来が不確かでも耐え忍び、前進する動機を与えてくれます。紛争下での効果的な介入は、差し迫ったニーズへの対応と長期的な安定の両方を視野に入れるべきです。

食料、医療、心理的サポートなどの人道支援は、即時の生存に不可欠です。更に、教育や自己開発のための安全なスペースを確保したり、避難所を提供することは、ユースのより良い未来に備える手助けとなります。また、紛争の根本原因に対処するべく、政治的な解決策や和平交渉を提唱することも不可欠です。しかし、ガザでは今、私たちは何も受け取っていません。誰も私たちのことを気にかけていないと感じます。ユースは、外の世界から見捨てられたと感じています。紛争は延々と続き、人びとはもはや私たちに起こっていることに何の驚きも感じません。戦争が終わり、再び安心して街に出られるようになれば、私はとても助かるでしょう。それが実現する可能性や、戦争が終わった後も自分が生きているかどうかはわかりません。でも、私たちの主張が疎外され、誰も耳を傾けてくれないと感じないですむことが、救いになるかもしれません。私たちは様々な意味で死につつあるのに、誰か1日でも私の立場になって考えてみたことがあるでしょうか?

「まだやりたいことがたくさんあるのに…」

— Fatima、23歳、ガザ



母親と子ども、ガザのテント群
© Tdh / Abed Zagout

ガザ

2005年以来、ガザは空・陸・海からの軍事包囲を受け、人びとの移動が制限され、基本的な物資や商品の流れが管理されてきた。ガザにおける紛争の最近の激化は、2023年10月7日にイスラエル南部の複数の町に対する攻撃が起こり、1,200人以上のイスラエル人と外国人が死亡し、252人が人質にとなったことに続いて起こった[27]。2024年8月現在、パレスチナ保健省は、ガザで1万4,000人の子どもを含む4万人以上のパレスチナ人が死亡したと推定している[28、29、30]。

2023年10月以降

- 8万9,364人超のパレスチナ人が負傷し、行方不明者は1万人。1万7,000人のパレスチナ人の子どもが、家族と離れ離れになっているとみられている[31、32]。
- 2024年6月現在、630人の子どもと295人の女性を含む1万人超のパレスチナ人がイスラエル当局に拘束されている。拘束者に対する拷問や虐待の報告や正規手続きの欠如により、パレスチナ人の拘束の恣意性と懲罰的な性質に対する懸念が高まっている[33]。
- ガザの住宅の60%超が破壊または損壊し[34]、現在190万人超が避難を余儀なくされている[35]。
- ガザの学校の90%超も損壊または破壊され、残りは避難所として使用されている[36]。教育を受けられない子どもは62万5000人に上ると推定されている。

ガザでの紛争は、壊滅的な規模の人道的危機である。イスラエル軍によるガザへの爆撃に加え、イスラエル政府は、パレスチナ市民の巨大な人道上のニーズを満たすためにガザに入ってくる援助物資に対する包囲戦術と組織的な制限を継続している。

これには生活必需品や救命物資も含まれる。アクセス制限には、恣意的な生活必需品の供給阻止も含まれる[37]。プラン・インターナショナルやその他の人道支援団体[38]は、パレスチナ民間人への人道支援の制限、人道支援従事者の殺害、人道支援への深刻な妨害など、国際人道法上の義務や民間人の命を無視した行動を非難する共同声明や報告書を数多く発表している。ガザ全域にわたる医療施設や病院の大半が意図的に破壊されたことに加え、過密状態や清潔な飲料水や適切な衛生設備の不足により、深刻な健康上の懸念が生じている[39]。

援助機関は、女性が医療支援を受けられずに出産を強いられ、レイプや性的暴行に遭う確率が高く、避妊を含む性と生殖に関する医療へのアクセスが困難であることに重大な懸念を表明している[40]。2024年7月現在、IPCはガザ全域で飢饉のリスクが高いと警告した[41]。紛争開始からわずか4か月後の2024年3月には、ガザで死亡した子どもの数は、過去4年間に世界各地で紛争により死亡した子どもとして国連が確認した数を既に上回っていた[42、43]。

壊滅的な暴力の規模と、家族全員を失った子どもの膨大な数により、救急隊員や医療チームの間では「傷ついた子ども、生き残った家族なし」（Wounded Child No Surviving Family F/ WCNSF）という新しい略語が使われるようになった[44]。メンタルヘルスの専門家は、ガザの子どもは、現在の紛争が始まる前から心的外傷後ストレス障害の割合が53%に達していたが、現在ではメンタルヘルスケアを受けられないまま、重大なトラウマとなるような出来事に恒常的にさらされていると警告している[45]。

ガザで現在も続く紛争は、パレスチナ民間人だけでなく、レバノンを含む地域全体に広範かつ深刻な影響を及ぼしており、更に地域全体に広がる紛争の危険性も高まっている。

プラン・インターナショナルは、援助機関や人権団体とともに、ガザにおける即時かつ持続的な停戦を求め、人命を救い・守るために、国際人道法や人権法の違反行為に使用されたり、その行為を容易にしたりする危険がある限り、各国が武器の供給を停止すること、そして、パレスチナ市民の巨大なニーズを満たすために、ガザ地区内への援助物資の搬入・輸送を可能にする安全で確実なルートを確保することを求め続けている。

ヨルダンのジェラシュ難民キャンプは、地元ではガザキャンプとして知られている © Plan International / Anthony Huus

はじめに

今年の世界ガールズ・レポートでは、世界10ヵ所の紛争地域で成長する女の子と男の子、ユース女性とユース男性の経験に着目している。

調査では、3つの重要な問いに対する答えを求めた。

① **女の子と男の子の生活は、自国の危機によりいかに影響を受けているのか。最も影響を受けている主要な分野やサービスは何か。**

② **ユースが経験する紛争の影響において、年齢、ジェンダー、その他の交差する特性はどのような役割を果たすのか。**

③ **紛争の経験により、女の子と男の子の人生の軌跡はどのように変化したのか。彼らの将来への希望は何か。**

調査参加者の経験は、往々にして衝撃的なものだ。暴力の常態化、死と破壊に満ちた環境、彼らが生々しく描写する飢えと恐怖は、本来であれば誰の日常的な経験であってはならないものである。

生き残った者は、自身に起きたことを受け入れるのに苦労するだろう。インタビューに回答した多くユースは、武力紛争においては、女の子も男の子も、自身と同じ年代が最も苦しむと感じていた。だが、恐ろしいことに、ジェンダーが紛争の経験に非常に異なる役割を果たしていることも、この調査から明らかにされた。

> **「結婚する女の子が増え、学校を中途退学する子も増えています。性暴力、妊娠の強要、そしてパートナーの保護を求めてそうするのです」**
> Ikome、16歳、カメルーン

> **「誰もが紛争の影響を異なった形で受けたと言えます」**
> Addodas、19歳、エチオピア

紛争は、ある世代のユースの青春時代を奪う。教育を修了し、就職し、家を出るといった伝統的な節目が乱される。

女の子とユース女性は、性暴力の対象となりやすく、望まない妊娠をすることがある。一方、男の子は武装勢力や武装集団に徴用され、殺される可能性が高い。生活必需品を得る困難と生計手段の喪失は、全ての人に影響を与えている。この数年の苦難は、生涯にわたり影響を及ぼすだろう。

本報告書は、2024年にプラン・インターナショナルが実施した詳細かつ広範な調査を基に、紛争における女の子とユースの経験と、それが彼らの現在の生活や将来の希望に与える影響について明らかにすることを目的としている。また、紛争のジェンダー的影響を理解することも目的としている:人道支援が効果的であるためには、女の子、男の子、ユース女性、ユース男性の間にある特有の困難やニーズ、優先事項、役割の違いを認識することが重要である。また、ユースが何を伝えているかに細心の注意を払うことも極めて重要だ。調査対象となった10ヵ国は、それぞれ性質の異なる紛争を経験している;国によって、女の子とユースの紛争体験には共通点がある一方で、違いも大きい。対応策は、各国の状況と、各国における女の子とユースの経験の両方に合わせて調整する必要がある。

本調査では、特に女の子とユース女性が勇気をもって自身の経験を語り、希望やニーズを明確に表明した: 彼女たちの声は私たちの活動に反映されなければならない。

調査参加者は打ち砕かれた夢について語ったが、多くは望みを捨てていない。

> **「ユースは危機についてより多くを知っており、また、苦しみをより多く経験しているのも私たちであり、解決策をもたらす手助けができるのです」**
> Bate、22歳、カメルーン

彼らは今も将来の計画を立てており、その優先事項は明確だ。紛争の終結、暴力や搾取から身を守る、教育や生計のための取り組みを支援、性と生殖に関する健康(SRH)のための情報やリソースの提供、暴力からのサバイバーへの包括的な支援を含む心理的支援、平和構築への関与。

> **「ユースは紛争が何かを理解しており、年長者や当事者ではない人びとに対して異なる視点を提供することができます」**
> Valentina、18歳、コロンビア



学校で避難生活を送る子どもたち、スーダン © Plan International

調査方法*

量的調査:



9,995人
のユース

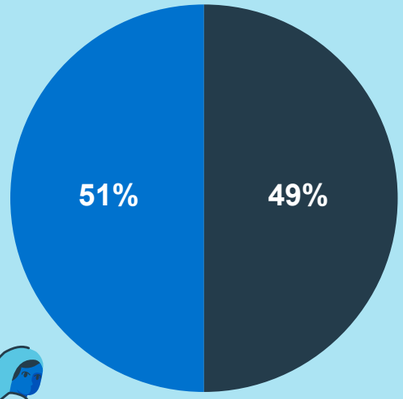


10カ国
から



15～24歳

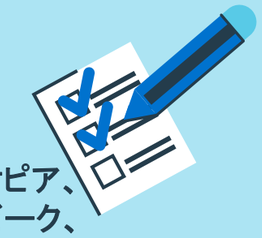
5,003人
の女の子とユース
女性



4,992人
の男の子とユース
男性



調査
回答者の21%
が避難民である



カメルーン、
コロンビア、エチオピア、
レバノン、モザンビーク、
ナイジェリア、スーダン、
ウクライナ、フィリピンを含む

調査対象国10カ国**

本調査は、GeoPollが採用・サンプリングの手法を組み合わせて実施した。

* 詳細な調査方法については、以下のリンク先の the 2024 State of the World's Girls Technical Reportを参照のこと:
plan-international.org/still-we-dream
** ある国は、政治的・運営上の理由から国名を公表できない

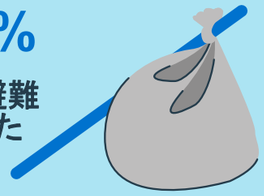
質的調査:

カメルーン、コロンビア、
エチオピア、フィリピン
の13～24歳の104人へのインタビュー



参加者の15%
は若年の保護者

参加者の60%
が紛争により避難を余儀なくされた



インタビューは、全ての参加者に全ての質問が行なわれるわけではない、半構造化形式で行なわれた。ユース中心の調査とするため、この形式を採ることで、インタビュー回答者が自由に議論を進めることが可能となった。インタビューでは、探求的なやり取りも可能であったが、参加者に多くの質問を投げかけることは避けた。



倫理と保護:

英国に拠点を置くOverseas Development Instituteの調査倫理委員会から調査への倫理承認を得た。

全てのデータ収集方法における潜在的なリスクと軽減策を特定するために、国別事務所の職員と協力し、包括的な保護リスク評価を実施した。参加者は幅広い機密情報を共有したため、保護手続きが実施され、包括的な事例管理サービスへのアクセスを含む、私たちの保護方針に沿った支援が提供された。

プラン・インターナショナルの倫理的アプローチの鍵は、参加者の声、経験、懸念を関連する政策やプログラムに組み込み、国や地域レベルで参加者の意見を認識させることである。

私たちが学んだこと

関連調査の検証によると、ガザ、ウクライナ、スーダン、エチオピア、そしてその他多くの紛争の影響を受けた国々で、女の子とユースが、喪失、恐怖、破壊という類似した経験を共有しており、それは彼らの身体的・心理的健康や、逃した機会という観点において、生涯にわたる影響を及ぼす可能性がある[46]。

多くの地域では、紛争は飢饉、洪水、干ばつ等、他の人道危機も合わせて起こっており、暴力と困難を増大させている[47、48]。本調査では、類似点を認識しつつも、詳細と相違点に注目している。ジェンダーは紛争の経験にどう影響するのか、主な相違点はどこにあるのか、そしてそれは生存、そして紛争後の国家とコミュニティの再建にとって何を意味するのか。

紛争の全体的な影響 20

危険を感じる:
日常生活における暴力の経験 26

武装集団の脅威 30

教育: 戦争の犠牲 33

健康と幸福 37

生計と経済的安定 41

サービスとリソースへのアクセス 43

援助機関の役割 45

将来を見据えて 47

空爆で被害を被った集合住宅を眺める男性、ウクライナ
© Plan International / Viacheslav Ratynskyi

「あまり対処できていない…」

紛争の全体的な影響

本報告書の後半では、調査で取り上げた主要テーマのいくつかを更に深く掘り下げて検討する。

本セクションでは、避難所、食料、水の不足から、避難や生計手段の喪失、暴力や死に至るまで、紛争がもたらす様々な全体的な影響の広がりが示される。本調査から、毎日の生存の現実の恐ろしさが明らかになった。もちろん、ジェンダーや居住地、貧困や家族の状況、民族、年齢、個人の性格によって、経験は異なる。しかし、生存のための闘いは誰にでも影響を及ぼす。

女の子とユース女性は、十分な飲食やネット等のサービスへのアクセスに苦労しているようだ。これは、女の子のニーズが優先されることがほとんどない家庭内での、比較的よく知られた既存のジェンダー不平等を反映している[49]。

ユースに紛争が生活に及ぼす影響について尋ねたところ、彼らの多くが生活必需品を欠いていることが判明した:

41%が水へのアクセスが全くないか、非常に限られていると回答

44%が食料へのアクセスが全くないか、非常に限られていると回答

59%が電気へのアクセスが全くないか、非常に限られていると回答

49%がネットや電話へのアクセスが全くないか、非常に限られていると回答



難民キャンプのテントから外を眺めるシリア難民、レバノン © Plan International / Hussein Nouredine

表1: 性自認別、参加者の紛争経験

自国や地域での紛争の結果、以下の経験をしたことがありますか	女の子とユース女性		男の子とユース男性		合計	
	人数	%	人数	%	人数	%
電気・ガス・燃料等へのアクセスが全くない/非常に限られている	2910	59.40%	2825	57.90%	**5735**	**58.60%**
ネットや電話へのアクセスが全くない/非常に限られている	**2486**	**50.70%**	**2268**	**46.50%**	**4754**	**48.60%**
食料へのアクセスが全くない/非常に限られている	**2204**	**45.00%**	**2069**	**42.40%**	**4273**	**43.70%**
水へのアクセスが全くない/非常に限られている	**2141**	**43.70%**	**1897**	**38.90%**	**4038**	**41.30%**
教育を中断せざるを得なかった	1988	40.60%	1916	39.30%	**3904**	**39.90%**
医療へのアクセスが全くない/非常に限られている	1762	36.00%	1734	35.50%	**3496**	**35.80%**
収入源の喪失[例:仕事/収益/農地]	1508	30.80%	1469	30.10%	**2977**	**30.40%**
所持品や財産の喪失	1337	27.30%	1394	28.60%	**2731**	**27.90%**
近親者と離れ、現在単独で生活	624	12.70%	698	14.30%	**1322**	**13.50%**
近親者と離れ、家族以外の人や近隣住民と生活	432	8.80%	441	9.00%	**873**	**8.90%**
上記に該当なし	631	12.90%	630	12.90%	**1261**	**12.90%**
合計	**4900**	**100.00%**	**4879**	**100.00%**	**9779**	**100.00%**

ジェンダー的な重大な影響

食料、水、ネットへのアクセスが全くない/非常に限られているという回答には、ジェンダー間で大きな違いが見られた。女の子とユース女性の方が、男の子やユース男性よりも、基本的なニーズへのアクセスに困難を訴えている。

詳細なインタビューは、食料と水の確保に苦慮し、家を追われた家族が経験した苦難を明らかにしている。

「この危機は、私と家族に影響を与えました。家を離れ、慣れない異なった生活様式に適応しなければなりませんでした。故郷では、物事はもはや以前と同じではありませんでした。ここではほぼ全てを購入しなければならず、耕作する農地もありません。最も重要な変化は、故郷から、一度も行ったことのなかった見知らぬ土地へと移り住んだことです」
Dalma、13歳、カメルーン

質的インタビューに回答した4ヵ国の参加者の半数超は、現在避難中であるか、過去に避難し、現在は家に戻っている状況だった。その多くは暴力を経験しており、中には愛する人を失った者もいた。教育や生計手段が妨げられたことは言うまでもない。

「私たちが持ち出したのはまさに衣類だけでした。彼らは私たちに警告もせず、『15日以内に退去せよ』などと言って時間を与えもしませんでした。彼らはすぐにやって来て、持ち出せるものを持って退去せよと言いました。私たちはその通りに退去し…大変な思いをしました。兄弟たちは去り、その時、母が病気になりました」
Raquel、22歳、コロンビア

多くの回答者は、ぎりぎりの生活を強いられていると語った。その一人であるBessongは、父親が一家を支えていたが、祖母と彼女の幼い子どもを養う責任を負うことになった。

「あまりうまくできていません。子どもに食べ物を与えるのが難しく、子どもと自分の世話だけでも大変なのに、祖母は高齢で医療費もかかるからです。子どもの父親は私を助けてくれますが、十分ではないです。彼は費用負担をしてくれていますが、時には私を殴り、祖母を家から追い出すと脅します」
Bessong、24歳、カメルーン*

エチオピアのインタビュー回答者も、家を離れなければならず、新しい生活環境に苦労していると述べた。

「(キャンプでは)一人でいて、生存のために援助に完全に頼っています。援助が受けられない月もあり、食料を乞うこともあります…ここでは、10人が1つの部屋に住み、生き延びるのは難しいです」
Tigray**、18歳、エチオピア



プラン・インターナショナルがベネズエラ人家族を支援する緊急支援プロジェクトを開始したコミュニティ、コロンビア
© Plan International / Anika Büssemeier

* この参加者には、保護を目的とした経過観察が実施された
** この参加者は「Tigray」という偽名を選んだが、本書で言及しているティグレ地方と混同してはならない。また、Etigray(女の子、16歳)という参加者がいる

エチオピアからの他の参加者は、女の子と男の子、ユース男性とユース女性が紛争によって異なる影響を受けていると述べた。

「紛争の影響はユース女性により深刻で、私たちはその間、多くの困難を経験しました。多くの女の子が紛争中にレイプされ、更に、男の子と比較して、私たちは家で働く時間がほとんどです。つまり女の子に多くの負荷がかかっているのです。そのため、これらの困難は多くのユース女性をうつ状態に陥らせ、これらの女の子の大半が何らかの精神疾患を抱えています」
Dansha、17歳、エチオピア

コロンビアの家族は、時に何度も避難を余儀なくされた。参加者は、武装集団によって家族が殺害されたり、行方不明になったりするような絶え間ない暴力を描写した。多くの者は長期間にわたり恐怖にさらされた状態にあった。

「パラコスが侵入してきました…ある時、彼らがやって来て…父を殺そうとして、父は逃げなければならず、全員何も持たずに逃げなければならならなかったのです…」
Valentina、18歳、コロンビア

コロンビアでも、インタビュー回答者は、暴力や殺人がコミュニティ全体で日常化していると指摘した。新しいギャング集団が近隣に現れ、銃撃戦が起こることは日常茶飯事である。この日々の暴力が、彼らにとって紛争の第一の経験であり、生活必需品をめぐる闘争を圧倒し、複雑化させていた。また、警察は役に立たず、武装ギャング集団を制御できないと感じていた。移動の自由はほとんどなく、そこには「見えない障壁や国境」が存在し、それを越えることは命を危険にさらすことだった。

フィリピンでも、参加者は銃声や暴力に囲まれて暮らしていると述べた。Mariam(21歳)は、紛争と自然災害の二重の影響がコミュニティに及んでおり、「紛争、洪水、一族間の確執でいっぱいです」と説明した。

フィリピンでは、多くの人が経済困窮に苦しみ、何度も転居を余儀なくされていた。

「転居した回数は数えきれません…私たちのなかには料理をしていたけれど、食べ物を残して行くしかありませんでした…特に、転居する人が既に経済的に苦しい状況にある場合は困難です。他人の家に避難するのは更に難しいです…」
Mahid、18歳、フィリピン

° コロンビアのスラングで「準軍事組織」を意味する

私たちが学んだこと

フィリピンでは、エチオピアと同様に、紛争による混乱が女の子と男の子、ユース女性とユース男性に与える異なる影響について回答者は議論した。エチオピアでは性暴力が苦痛の主な原因として強調されたのに対し、フィリピンでは回答者は女性の家庭での役割、日々の生存のための闘い、責任と不安の増大に焦点を当てた。

> **「女性の方がより影響を受けています。男性も影響を受けていますが、彼女たちは幼い子どもの世話を任されており、紛争による避難の際には子どもを連れて避難する手助けをしてくれる人もいないため、女性の方が影響を大きく受けています。おそらく、日々の必要を満たす方法を考えているからでしょう。皆が苦労していることは分かっていますが、女性の方がより苦労しています」**
>
> Fatima、15歳、フィリピン

紛争・避難・暴力・食料や水、基本的なサービスへのアクセスの困難といった経験は、しばしばジェンダーや、女の子とユース女性の子育てや家事の責任や性暴力に対する高い脆弱性と、男の子やユース男性に対する戦闘への期待や保護者や稼ぎ手となる必要性といった、既存のジェンダー役割によって左右される。これらは戦時下でも消えることはなく、多くの点で悪化している。



女の子とその娘、フィリピン
© Plan International / Michael Perfecto

事例研究：有望な実践例

プラン・インターナショナル・エチオピア

Amina(16歳)の村で紛争が勃発した際、彼女と家族は全てを残して避難せざるを得なかった。エチオピア北部の紛争は、Aminaのような女の子に傷跡を残した。紛争の火種となったアムハラ地域から避難し、絶え間ない不安と恐怖に非常に苦しめられたAminaは、食料不足、教育へのアクセス、あるいは子どもが楽しむ日常的な活動の欠如など、あらゆる面で悪化する事態に対処しようと奮闘した。この地域の子どもは、暴力を目撃し、子どもが経験すべきではないことを経験してきた。Aminaのような女の子の何人かは家族や友人と引き離され、辛い記憶を抱えていた。

プログラム

Aminaや彼女の様な多くの子ども、そして紛争の影響を受け避難生活を余儀なくされている人の間で急激に高まった人道的なニーズ全体に対応するため、プラン・インターナショナル・エチオピアは多角的な人道支援を開始した。救命と保護のニーズへの対応は引き続き優先事項であった。

このプログラムでは、避難民と受け入れコミュニティ双方の中長期的なニーズについても検討された。

女の子や女性に直接耳を傾け、SGBVを含む暴力のサバイバーである子どもを優先的に支援し、ジェンダーや年齢に配慮した包括的なサービスを提供することで、彼女たちのニーズに応え、尊厳を強化し、希望を回復させた。

プラン・インターナショナルのサービスの重要な要素は、暴力のサバイバーの子どもへの事例管理と心理社会的サービスの提供に焦点を当てたものだ。個人およびグループでのケアとサポートセッションを通じて、訓練を受けたケースワーカーと心理的社会的サポートワーカーが、Aminaが立ち直り、自身を取り戻し、癒しの道を見つけるのを助けた。この取り組みで重要な役割を果たしたのは、影響を受けたコミュニティのために作られた安全なスペースだ。このスペースでは、サバイバーとなった子どもを含む住民が集まり、互いの経験を共有し、癒しと回復のコミュニティの中で支え合うことができる。

重要な教訓は、暴力のサバイバーの子どもに対するサービスの影響は、個々の回復以上のものをもたらすということである。システム全体の変化の重要性を認識したプラン・インターナショナル・エチオピアは、国会議員を集めた提唱活動、政策、人道外交活動にも貢献した。私たちは政府や他の人道支援団体と協力し、暴力の生存者の子どもに対する意識を高め、サービスの改善を提唱した。プロジェクトを開始・継続するには、資金不足、サバイバー絶え間ない移動や転居、メンタルヘルス上の問題に対する偏見、説明責任を促進するための既存のツールやメカニズムの欠如など、数多くの課題が存在した。

長期的支援を行ってきてコミュニティとの社会契約を尊重するものであり、とりわけリスクの高い女の子を含め、誰一人取り残さないことを保証するため、プラン・インターナショナル・エチオピアは、紛争の影響を受けた地域に留まり、サービスを提供した。

暴力のサバイバーの子どもへの支援は、紛争で全てを失ったコミュニティにとって必要不可欠な統合的アプローチの一例である。また、メンタルヘルスと心理的社会的サポート、SRHR、子どもの保護事例の管理、教育、そして食料や生計手段といった人道上の主要なニーズに対応するサービスを組み合わせた、統合的なアプローチの重要性を強調している。このような活動に政策、提唱活動、人道外交の取り組みを組み合わせることで、直接的なサービス提供はより大きな効果を生む。このような統合的なアプローチが、その状況下で独自の価値を付加し、Aminaのようなサバイバーが尊厳と希望を持って生活を再建する手助けとなるのである。

私たちのプログラムは、Aminaのような子どもの差し迫ったニーズに単に応えるだけではなく、子どもが立ち直り、享受すべき未来を築くために必要なツールと支援を提供し、子どもをカづけることを目的として設計されている。私たちは、最も脆弱な人びとへの揺るぎない献身を表明し、最も困難な状況下でも、子どもが一人として取り残されることのないよう、支援を継続・提供していく。



難民キャンプで母親と妹と暮らす女の子、エチオピア © Plan International

「暴力が増えているのは、当事者が自分たちには全てを支配する力があり、好きにできると信じているから…」

危険を感じる: 日常生活における暴力の経験

暴力に対する恐怖や経験において、ジェンダーの間の違いは、ユース女性とユース男性、女の子と男の子の、彼らの状況についての生々しい描写に明らかである。

紛争に参戦するのは主にユース男性である[50]。彼らは軍や武装集団に勧誘・強制され、インタビュー回答者が指摘するように、紛争の直接的な結果として命を落とす者が多い。

> **「紛争中、女性は悪質な攻撃や嫌がらせを数多く経験してきました。また、早すぎる結婚のような人生における誤った決断を強いられてきました…私たち女性はレイプや嫌がらせのような事件を経験してきましたが、大半の男の子は紛争で命を落としているのです」**
> Sheraro、17歳、エチオピア

女の子とユース女性は、これは彼女たちに限ったことではないが、日々の生活の苦悩や性暴力のトラウマと対峙している。

報告されている過激な性的暴行の形態は、限定されるわけではないが、特とりわけチオピア北部で多く見られ、性暴力が紛争の武器として組織的に使用され、女の子とユース女性に生涯にわたる壊滅的な影響を与えていることが示されている。同国で最も強く浮かび上がるのは、女性に対する性暴力の生々しく恐ろしい描写であり、多くのインタビュー回答者が自身の経験を語り、また、女の子とユース女性がいかに危険にさらされているかの認識を示す者もいた。

> **「紛争が勃発した際、この地域から女性を避難させる取り組みが行われたけど…残された女性はレイプされたわ」**
> Aculle、18歳、エチオピア

エチオピアの3人の女性参加者は、武装集団によるレイプや集団レイプを含む性暴力を直接経験した。2人は数週間監禁されていた。

> **「その家で、私は5日間、集団レイプを受けました」**
> Axum、20歳、エチオピア



避難民キャンプの自宅へ向かう途中に男に襲われた女の子、エチオピア© Plan International

女の子とユース女性の27%が、男の子とユース男性の17%と比較して、性暴力の危険を身に感じていた。

性暴力は、広範にわたり常態化しており、全ての女性と女の子を対象とするものと議論された:

> **「紛争中、私のように襲われた女の子はたくさんいます。中には、自分の子どもや夫の前でレイプされた母親もいます」**
> Shire、21歳、エチオピア

女の子とユース女性は、望まない妊娠、社会的スティグマ、排除等、レイプの壊滅的な影響についても強調した。

ある女性は公衆の面前でレイプされ、妊娠し、夫や家族から疎外され、助けを求める先もなく、医療処置も受けられず、孤立し、心を閉ざしてしまった。

これは珍しいことではない。Shireをはじめ、個人的な体験を語った他の人びとは、性暴力のサバイバーが差別され、苦しみ、そして、普通の生活にほぼ戻れない状況にあると述べた。

> **「紛争後、あなたが経験したことを嘲笑しようとする人がいれば、それが新たな試練となり、精神的に追い詰められます。例えば、私は生まれ育った家が大好きですが、もう戻りたいとも住みたいとも思いません。それは、痛みを嘲笑するような社会と一緒にいたくないからです」**
> Shire、21歳、エチオピア

詳細なインタビュー参加者が目撃・経験した暴力の恐ろしい描写を読むと、全体としては、調査回答者のたった38%が「危険」または「非常に危険」と回答して驚くかもしれない。

だが、様々な種類の危険が存在し、各国の子どもとユースが以下のようなリスクを最も感じると報告している:

46%
銃撃

34%
略奪

34%
就職難

31.5%
飢餓

30%
空爆

認識されたリスクが最も高かった上記の全てのカテゴリーにおいて、女の子とユース女性は、男の子とユース男性よりも危険をはるかに強く感じていた。

また、身体的・性暴力や強制結婚のリスクが高まり、学校や医療施設にアクセスできなくなることも懸念していた。

性暴力の危険に対する認識の差は特に大きく、女の子とユース女性では27%であるのに対し、男の子とユース男性では17%である。また、結婚を強要される危険に対する認識の差も大きく、前者は14%、後者は9%である。

表2: 参加者が認識している「紛争により最もリスクが高いと考えること」(ジェンダー別)

現在住んでいる地域または国の紛争により、最もリスクと感じていることは何か	女の子とユース女性		男の子とユース男性		合計	
	人数	%	人数	%	人数	%
銃撃	**2339**	**47.80%**	**2170**	**44.40%**	**4509**	**46.10%**
略奪	**1749**	**35.70%**	**1579**	**32.30%**	**3328**	**34.00%**
就職難	**1727**	**35.30%**	**1587**	**32.50%**	**3314**	**33.90%**
飢餓	**1642**	**33.50%**	**1438**	**29.40%**	**3080**	**31.50%**
空爆/爆弾	**1509**	**30.80%**	**1451**	**29.70%**	**2960**	**30.20%**
就学不可	1350	27.60%	1161	23.70%	2511	25.70%
性暴力	1336	27.30%	852	17.40%	2188	22.40%
人質	1299	26.50%	1185	24.20%	2484	25.40%
身体的暴力	1257	25.70%	1041	21.30%	2298	23.50%
病院/診療所にアクセス不可	1189	24.30%	1044	21.40%	2233	22.80%
地雷	904	18.50%	768	15.70%	1672	17.10%
兵役/入隊の強制	898	18.30%	953	19.50%	1851	18.90%
結婚の強制	703	14.40%	426	8.70%	1129	11.50%
上記に該当なし	609	12.40%	625	12.80%	1234	12.60%
合計	**4897**	**100.00%**	**4889**	**100.00%**	**9786**	**100.00%**

ジェンダー的な重大な影響

女の子とユース女性は、男の子とユース男性よりもはるかに危険を感じていると回答。

これらのジェンダー格差は、詳細なインタビューで強調された。カメルーンでは、回答者が安全リスクに明確なジェンダー間の違いを指摘した。

カメルーンの女性参加者の大半は、女性と女の子が危険に遭うのは、走ったり、戦わなければならない場合、「侵害」される可能性があり、「弱い」からだと考えていた。

ある女の子が指摘したように、男の子と男性は、軍や武装集団による嫌がらせ、恣意的な逮捕、殺害のリスクが高いとされている。

> **「男の子も軍にAmba boys*と間違われることを恐れています」**
> Tabe、14歳、カメルーン

*カメルーンの英語圏地域出身の武装分離派戦闘員

また、調査回答者には、紛争による暴力の増加と加害者についても尋ねたところ、大多数が誘拐、性的暴行または暴力、児童労働の増加を報告し、主な加害者として武装集団と見知らぬ人があげられた。

ごく少数の参加者から疑問が提起されたフィリピンを除き、全ての詳細なインタビューで、暴力は常態化しており、増加しているとされた。

> **「両当事者が自分たちは全てを支配でき、好き勝手にしても、それに誰も反抗しないと思っているため、増加しています」**
> Ikome、16歳、カメルーン

「男性は貧困の緊迫感から、苛立ちを爆発させて女性を殴るのです」。
Bessong、24歳、カメルーン

コロンビアでは、暴力は以前よりはましだと感じている参加者もいたが、ジェンダー間で感じる安全の差は依然残っており、女の子と女性は男の子と男性よりも危険にさらされていると感じている。多くの回答者が、嫌がらせや性暴力について言及し、レイプの事例を知っていると答えた。Marthaは、レイプの危機から間一髪で逃れたこと、そして姉妹の一人が何度もレイプされたことを明かした。

> **「彼らは彼女に何かが混入した飲み物を与え、彼女を連れ去り、彼女は何も分からぬまま帰宅しました。彼女は薬を飲まされていて、強制的にレイプされたのです」**
> Martha、22歳、コロンビア

インタビュー回答者の多くは、強盗、恐喝、そして様々な武装集団間の銃撃戦に巻き込まれることで、ジェンダーに関係なく、ユース一般が暴力の被害に遭う可能性が高いと答えている。

> **「毎日、22歳や17歳のユースが殺されるのを目にしているから」**
> Martha、22歳、コロンビア

紛争とCOVID-19により、子どもとユースに対する暴力が悪化していると感じている参加者もいた。18歳のYirlesaは、子どもが身体的・言語的・心理的な暴力にさらされており、それが増加していると指摘した。「今では誰もが銃を持っている」と彼女は述べた。また、紛争が始まって以来、13歳や14歳の子どもが銃を持って強盗をする姿をよく目にするようになったとも述べた。

エチオピアでも、多くのユースが殺傷されたとされている。

> **「紛争中、銃撃で亡くなった人もいれば、ドローンや飛行機から落とされた爆弾で亡くなった人もいます。私の友人を含め、多くのユースが紛争で命を落としました。多くのユースが、他に選択肢がなかったために紛争に参加し、そのほとんどが命を落としました」**
> Arbeti、15歳、エチオピア

「紛争中、銃砲が町に撃ち込まれ、多くの死傷者が出ました..私たちは、約60人の遺体を、そのほとんどがユースでしたが、それらを埋葬しました。個別の埋葬場所を掘って準備するのは困難だったので、私たちは、10人分の遺体を一度に一つの穴に埋めました」
Barri、24歳、エチオピア

「選択肢が他にない限り、紛争を愛する人はいないと思います…」

武装集団の脅威

多くの暴力は、武装勢力や武装集団によるものとされている。コロンビアの場合、武装集団が近隣地域を支配し、ギャングによる暴力行為を行い、恐喝や麻薬の運び屋で資金を得ていた。

調査した全ての紛争状況において、子どもの積極的な徴兵や、ユースが武装勢力や武装集団に加わることが確認された。

調査参加者の**18%**が**武装集団への参加/支援を求められた経験があり**、15～17歳の17%が武装集団への参加/支援を求められた経験があった。

男の子とユース男性は、女の子とユース女性よりも**武装集団への参加を求められる可能性が高い。**

女の子とユース女性の14%が**武装集団への参加を求められていた。**一方、男の子とユース男性では22%だった。

参加者の**31%**が、武装集団に加わったのは**自らの意思であった**と報告した。15～19歳の場合、33%が、自らの意思で関与したと述べた。

15～19歳の**25%**が、**脅迫や強要により武装集団に加わった**と答えた。

武装集団との接触があった可能性が最も高いのはスーダンの参加者で、モザンビークとエチオピアがそれに続いている。

> **「男の子は敬われ、力も得られると考えるから、女の子よりも武装集団に加わるのです」**
> Dalma、13歳、カメルーン

紛争時にユースがどの程度自発的に軍や武装集団に加わるかは実際、疑問である。人道支援活動における子どもの保護や国際法では、子どもの徴用は決して自発的なものではなく、常に状況や子どもの経験によって引き起こされていると考えられている。

これは調査結果でも裏付けられている。カメルーン、コロンビア、エチオピア、フィリピンでの詳細なインタビューによると、武装集団に加わる理由は数多く様々であり、それらは全て彼らが巻き込まれている紛争に起因し、雇用機会の欠如、保護の必要性、復讐心などが含まれる。

一部の参加者は、武装集団におけるジェンダー的役割について、全体的には、男の子/ユース男性は戦闘員、女の子/ユース女性はスパイ、看護婦、料理人であったと述べている。ただし、より広範な調査では、必ずしもこの点は確認されておらず、女の子やユース女性も武装戦闘員として活動している[51]。

コロンビアのインタビュー回答者は、武装集団の一部は、貧困家庭や家庭環境の悪い状況下にいる子どもなど、「弱点」のある子どもやユースを標的にする、策略家だと話した。また、学校に行かなくなり、バーやビリヤード場でたむろする子どもやユースも標的にしており、学校に行かない者を敢えて選んで、金や麻薬を差し出し勧誘していたと述べた。

Ana(24歳)は、地方の村の女の子は勉強する手段がないため、武装集団のメンバーと関係を持つことが多く、武装集団はそれを都合よく利用していると語った。

コロンビアの別の参加者は、子どもを誘惑する方法について説明した。

> **「『ここではチャンスが無い。自分に与えられたことに専念するしかない』、『家族を養うのに十分な額の収入が得られる』と、楽な方法が提示されたら、ユースは『わあ、参加したい』と心を奪われるのです。彼らが直面するリスクを知らされることなしに」**
> Calle、21歳、コロンビア

子どもやユースは雑用をこなし、薬物を売買・配布し、スパイ活動も行う。

> **「彼の仕事は、記録し、何が起こっているか、誰が出入りしているかという証拠を送ることです。不審な人物を見たら、報告しなければなりません。捜索が行われる場合は、それを報告する必要があります」**
> Johana、17歳、コロンビア



武装集団に加入する代わりに経済的な代替策を提供するプログラムに参加しているユース男性、フィリピン
© Plan International / Michael Perfecto

エチオピアの参加者は、武装勢力や武装集団に参加した、男の子やユース男性を中心とする大半のユースが、紛争経験によってそうせざるを得なかったと感じていた。

> **「紛争へのユースの参加は顕著であり、それは家族が受けた様々な残虐行為を目撃したからでした。姉妹や母親がレイプされるのを目撃した者もいれば、兄弟が殺される等を目撃し、強制的に駆り出されたのです。私は、ユースが自ら紛争に参加することを選んだのではなく、先に述べたようなことで紛争に参加せざるを得なかったと断言できます」**
> Korem、18歳、エチオピア

フィリピンでは、ほぼ参加者全員が、武装集団に参加するのは男性のみであり、その大多数が宗教上の理由からだと述べた。

> **「男性の方が強い。イスラム教に害を及ぼす敵がいれば守り、脅威があれば安全を確保するのが彼らの役割です。私たちの地域では、女性は武装集団に加わりません。それは、彼女たちがそれを恐れているからです」**
> Mahid、18歳、フィリピン

その他の理由として、収入を得るため、友人を作るため、銃器を扱う機会を得るため、などが挙げられた。

> **「両親からの唯一の助言は、そういう活動に一切関わらないこと。それは解決策にならないから。敵に狙われるだけで、状況が悪化する可能もあります。祖父も、勉強は私たちを助ける最も効果的な武器なので、勉強に集中すべきだと言っていました」**
> Youssef、17歳、フィリピン

国際法上では、軍隊や武装集団が18歳未満の子どもを徴用することは違法であり、紛争下の子どもに対する6つの深刻な権利侵害の1つである。

事例研究：
有望な実践例

プラン・インターナショナル・モザンビーク

プラン・インターナショナルは、軍または武装グループに関わる子ども（CAAFAG）の徴用を防ぎ、解放を促し、彼らのニーズに応えるためのプログラムを支援する、世界的な人道支援タスクフォースを主導している。

プラン・インターナショナルは、モザンビーク政府およびユニセフと協力し、モザンビーク北部における子どもと思春期の若者の徴用と紛争に関連した性暴力を防ぎ、それに対応するための包括的なプログラムを開発した。2017年以降、モザンビーク北部のカボ・デルガード州で継続中の紛争は、子どもと全ての民間人に壊滅的な影響を与えている。2024年5月現在、58万2,762人が避難を余儀なくされている[52]。そのうち6万人の子どもを含む約10万人が、この1ヵ月で避難を余儀なくされている[53]。何千人もの子どもが家族と離ればなれになり、暴力や搾取のリスクにさらされており、その中には武装集団による徴用も含まれている。これは、国連が定める紛争下における子どもの権利に対する6つの重大な侵害の一つである[54]。正確な数字は不明だが、モザンビークでは、特に若い思春期の男の子が武装集団に狙われ、女の子は性暴力のリスクが高まっているとする証拠もあり、これも深刻な人権侵害である。武装集団に誘拐される思春期の若者もいれば、より良い生活を約束されて参加を迫られる若者もいる。

プログラム

プログラムでは、子どもの徴用を防ぎ・対応するため、以下の戦略が採用されている。

1. 武装集団に徴用された子どもが特定され、家族のもとへ戻るための支援を受けられるようにする。このプログラムは、CAAFAGを含む危険にさらされている子どもを監視・特定・報告するコミュニティを支援している。計3,000人の子どもが、家族のもとに戻り、コミュニティへの再統合を支援する事例管理サービス、個別ソーシャルワーク型の支援を受けた。社会復帰した思春期の若者とその家族には、心理社会的および医療サービスへのアクセスや技能習得の機会とともに、経済的支援と社会支援が提供されている。
2. 家族やコミュニティにリスクを認識させ、子どもの徴用を防ぐ。このプログラムでは、武装集団が子どもを徴用する際に用いる戦略、徴用の末路、そして徴用を防ぐためにできることについて、1万人の子どもと思春期の若者、およびその家族に情報を提供している。子どもと思春期の若者を対象としたコミュニティ活動に彼らを参加させることで、武装集団に加わる以外の選択肢を提示している。



プラン・インターナショナルのプログラムは、武装紛争の影響を受けた13,000人の子ども、特に思春期の女の子と男の子に包括的な対応を行うため、多段階のアプローチを採用している。

学校で学ぶ子どもたち、カボ・デルガード州、モザンビーク© Plan International

不穏な情勢、現在も続く避難、武装集団と関連する子どもの不可視性といった困難にもかかわらず、このプログラムは、モザンビークにおける子どもの徴用を防止し、対応するための包括的かつ有望なアプローチを提供している。

「中途退学した生徒はたくさんいます…」

教育: 戦争の犠牲

暴力が激化すると、教育は常に脅威にさらされ、教育が生活において極めて重要であることは広く認識されているにもかかわらず、多くの調査回答者が教育を受けられていないという。

52%の女の子とユース女性、**53%の男の子**とユース男性が、**紛争により教育が受けられない**と回答した。

不就学期間の平均は1～2年で、女の子やユース女性よりも男の子やユース男性の方が長期にわたり不就学であるという。

女の子とユース女性の**27%**が、**男の子**とユース男性の**22.5%**と比較して、**通学時に危険を感じる**と回答した。

25%の女の子と**23%の男の子**が、**学校が損壊/破壊されたために学校に通えなくなった**と報告した。

ユースの30%が、避難を余儀なくされ、学校に通えなくなったと述べた。

調査から、予想に反して、女の子とユース女性よりも男の子やユース男性の教育の方が影響を受けていることが分かった。多くの先行調査では、困難な状況下では、家族は女の子より男の子の教育を優先させるとしていた[55]が、その結果、緊急事態における男の子の教育は軽視されてきた可能性があり、これは今後注視する必要がある[56]。

表3: 紛争で教育を受けられなかった理由(ジェンダー別)

なぜ紛争で教育の一部を断念しなければならなかったのか	女の子とユース女性		男の子とユース男性		合計	
	人数	%	人数	%	人数	%
紛争で休校となった	1452	58.20%	1386	55.00%	**2838**	**56.60%**
家を去らなければならず、学校に通えなくなった	749	30.00%	748	29.70%	**1497**	**29.90%**
通学が安全だと感じられなかった	666	26.70%	566	22.50%	**1232**	**24.60%**
紛争で学校が破壊/損傷した	629	25.20%	584	23.20%	**1213**	**24.20%**
雇用/収入先を見つける必要があった	**490**	**19.70%**	**564**	**22.40%**	**1054**	**21.00%**
家庭で他の家族を支える必要があった	**445**	**17.80%**	**462**	**18.30%**	**907**	**18.10%**
学校が避難所となった	414	16.60%	402	16.00%	**816**	**16.30%**
教師は誰もいなくなった	390	15.60%	339	13.50%	**729**	**14.50%**
家事や家族の世話のために家にいなければならなかった	303	12.20%	255	10.10%	**558**	**11.10%**
学校が武装勢力に占拠された	252	10.10%	247	9.80%	**499**	**10.00%**
新しい学校への登録方法がわからなかった	149	6.00%	121	4.80%	**270**	**5.40%**
病気や怪我で学校に通えなかった	147	5.90%	116	4.60%	**263**	**5.20%**
言葉の壁に直面した	129	5.20%	95	3.80%	**224**	**4.50%**
強制結婚により、学校に戻ることができなかった	84	3.40%	54	2.10%	**138**	**2.80%**
上記に該当なし	83	3.30%	103	4.10%	**186**	**3.70%**
合計	**2493**	**100.00%**	**2520**	**100.00%**	**5013**	**100.00%**

ジェンダー的な重大な影響

ほぼ全ての場合において女の子の方が学業を断念する可能性が高いが、就職や家庭を支えるために教育を断念していると回答したのは男の子の方が多かった。

教育を受けられなかった理由は、学校閉鎖、学校の損壊/破壊、学業の代わりに収入を得る必要があると回答した男の子の増加に見られる、経済的・実質的な家族支援の必要性、早すぎる結婚、通学が危険すぎる等、多岐にわたる。詳細なインタビューでも、安全への懸念や、女の子の就学率に影響を与える早期妊娠、男の子に影響を与える武装集団による徴用が主な理由として挙げられている。

> **「女の子が妊娠する一方で、一部の男の子は武装集団の活動に忙しいので、数はほぼ同じだと思います」**
> Yong、23歳、カメルーン

> **「もし若くして妊娠した場合、妊娠したからではなく、他の同級生に妊娠した姿を見られるのが恥ずかしくて、学校を去るのです」**
> Yirlesa、18歳、コロンビア

また、多くの参加者が、金銭的な制約が安全上の問題を一層深刻化させていると指摘した。

> **「例えば、バイクに乗るだけの十分なお金がないとか、あっても片道分しか持っていない場合、朝早く家を出なければならない人や、夕方6時には帰宅しなければならない人もいるので、でかけるのは危険です」**
> Ana、24歳、コロンビア

フィリピンでは、多くが、家計を助けるために学業を断念するよう、男の子とユース男性に重圧が強まっていると指摘した。

> **「彼らが学校を中途退学すると、モノを売ったり働いたりして家庭に貢献する傾向が強くなるのです。そのため、彼らは学校に戻らないことがよくあります」**
> Rania、21歳、フィリピン

エチオピアでは、インタビュー回答者の半数超が中途退学しており、多くが勉強を続けたいと強く望んでいると答えた。Aba-Alaは背中を撃たれ、痛みのために長時間座っていることができず、学校を中途退学せざるをえなかった。

> **「私の問題を解決できる方法があればいいのに。まだ学びたいという思いは強くあります。当時の状況と、学習を中断せざるを得なかった健康状態を考えると、とても残念です」**
> Aba-Ala、18歳、エチオピア

エチオピアの参加者数名は、教育におけるジェンダー化した障壁について論じた。保護者が女の子に家事を手伝えと家に閉じ込める傾向が強いという意見や、早すぎる結婚や早期妊娠の問題性を指摘する見解もあった。



学校から家へ帰る子どもたち、コロンビア
© Plan International

52%の回答者が、紛争により教育を受けられなかったと回答。



加速教育クラスで学ぶ女の子、ナイジェリア
© Plan International

> 「紛争後、女の子は皆結婚し、今では子どもがいる。彼女たちは学ぶのをやめました」
> Aba-Ala、18歳、エチオピア

Etigray*は、母親を支え、姉妹たちを学校に通わせ続けるために、6年生で教育を断念した。

> 「妹たちの教材やその他の必要なものを買うために、私は近所の家を回って洗濯をしています。この年頃であれば学校にいるべきですが、働いて家族を支えるしかありません...将来は教育を受け、生産的な人間になりたいと願っているのに、惨めです」
> Etigray、16歳、エチオピア

至る所で、女の子とユースは学校内と学校周辺の警備強化、経済的支援、心理社会的支援を求めていた。多くの者が、今も残る苦痛により、学習再開が非常に困難になっていると感じていた。

> 「彼らに心の支えを持つよう勧めることだと思います。心理士のところに行くべきです。不要だと思う人もいるでしょうが、話して、手放すべきことが本当にあります。心理士のところに行くか、支援を受けるよう勧めてください」
> Valentina、22歳、コロンビア

4ヵ国全てのインタビュー回答者は、武装紛争が教育に与える影響は、女の子と男の子、ユース女性とユース男性に同程度に及んでおり、彼らは皆、暴力的な環境、学校の破壊、家族の避難、経済的な制約に苦しんでいるが、必ずしも同じ形で、同程度に苦しんでいるわけではないという。

* 参加者のEtigray(女の子、16歳)と、もう一人の参加者のTigray(ユース女性、18歳)を混同しないこと

「まだ悲しみに暮れています…」

健康と幸福

58%の女の子とユース女性が、49%の男の子とユース男性と比較して、継続的な心配を訴えている。

詳細なインタビューでは、調査で報告された精神的苦痛が浮き彫りになり、多くの回答者が、メンタルヘルスやSRHのサービスへのアクセスが非常に限られているか、全く存在せず、ストレスを一層増大させていると指摘した。コロンビアでは、メンタルヘルス上の支援を求めることに対するスティグマがあり、人びとを遠ざけている:

> 「受診したら、それを口にできません。非難を浴びせかけられますから。誰かに「心理カウンセリングを受けよう」と言われたら、「そんなの狂人のすることだ」と言うでしょう。落ち着かせるどころか、恐怖を煽るだけです。私はしたくて、孤独で、気分が悪いし、誰かの助けが必要なのに、誰も助けてくれない...誰かと話したいだけなのに、それすらできない人もいます」
> Calle、18歳、コロンビア

カメルーンでは、他者が感情的なトラウマを感じているという認識が存在する。

> 「以前、話したことがあるIDPの中には、大きな音を聞くと、それが銃声だと思い、また死体や血をみてしまうので眠れないと教えてくれた人もました」
> Makola、19歳、カメルーン

彼らの気持ちについて聞いたところ、回答から現れたのは、長期的なストレスと混乱の姿であり、それは彼らの将来の心身の健康にまで影響を及ぼすだろう[57]。更に、これは、多くのインタビュー回答者が強調した心理社会的支援の緊急の必要性を裏付けるものである。

55%
の参加者が眠れないと回答

54%
の参加者が緊張し、リラックスできないと回答

54%
は常に不安を感じている

43%
が欲求不満を覚えている

42%
が絶望感を感じている

エチオピアの参加者は、医薬品や設備の枯渇、あるいは紛争中に施設が破壊され、身体的・精神的な医療支援へのアクセスが全体的に欠如していることを挙げた。一部の参加者は、治癒可能な病気や出産が原因で命を落とす人がいると指摘した:

> **「ここの医療施設が整っていないため、治療可能な病気で亡くなる方を多く知っています。出産時に亡くなる女性もいて、深刻な状況です」**
> Afambo、15歳、エチオピア

> **「また、アファールでは多くの女の子が割礼を受けるため、出産時に痛みを伴うか、命を落とすこともあります。そのため、早すぎる結婚の後、出産も女の子にとって最大の難関となります」**
> Addodas、19歳、エチオピア

多くのインタビュー回答者は、紛争中、ユースは非常に苦しみ、彼らの多くにとって、生活は耐え難いものであったと述べている。

> **「多くのユースがうつ状態になり、中には両親や兄弟姉妹、友人、親戚を失って精神障害を患った者もいました。紛争の影響に耐えられず、中途退学した人も知っています」**
> Abdibora、16歳、エチオピア



仮設避難所で暮らす女の子、エチオピア
© Plan International

特に女性と女の子にとって、性暴力の文脈において医療は特に重要であると考えられていた。紛争中にレイプされた多くの人に対する心理的サポートの欠如および関連する妊娠を含めた後続する医療ケア、利用可能な医薬品や設備の欠如が指摘された。

Shireは、武装集団に拘束されていた間に受けた性暴力に、適切に対処するための医療支援を一切受けられなかったことを訴えた。

> **「ここに医療サービスはありません。なぜなら、能力が全くないからです。例えば、私は精神的・心理的療法を受けるために保健センターに頻繁に通っていましたが、そこで何らかの支援や治療を受ける機会は一度もありませんでした。更に、薬や医療機器も欠如しています」**
> Shire、21歳、エチオピア

フィリピンの参加者は、トラウマを抱える人を支援するサービスは存在せず、問題は一人で解決しなければならないという見解で一致した。

> **「誰も(必要なときに助けを得ることが)できません。ただ問題に正面から立ち向かうだけです」**
> Marlam、21歳、フィリピン

コロンビアでは、回答者の3分の1がSRHRサービス、主に子宮内避妊器具やコンドームが入手できる病院での家族計画サービスが利用可能であると回答したが、医療サービス全般へのアクセスについては懸念を示した。また、学校で避妊について学んだという回答者もいたが、一部の回答者はサービスが不十分だと感じていた。

> **「ええ、学校であります。主に学校で。病院がキャンペーンとして、学校で性教育に関する講演を行っています。私のときは、コンドームを配布して、そのつけ方を教えてくれました」**
> Frijolito、24歳、コロンビア

参加者の大半は、当該地域で妊娠する女の子の数が増えていると考える一方、その原因は紛争ではないと回答した。だが、妊娠増加の主な理由として挙げられたのは、教育や経済的な機会の欠如であり、いずれも調査結果から明らかなように、紛争と関連している。

> **「いいえ、主に教育や訓練の欠如が原因だと思います。でも、紛争も原因の一つです。紛争が大きければ大きいほど、ユースに訓練をさせるために国家が彼らの居住地に入ることはできないと思います」**
> Calle、21歳、コロンビア



レバノン南部の紛争により避難生活を送る18歳の女の子が、プラン・インターナショナルの職員に語る
© Plan International

カメルーンでは、コロンビアとは異なり、大半の参加者が、妊娠率の上昇は紛争と性暴力の増加、それに加えて女の子の不就学と貧困が原因であると考えていた。

> **「学校に行かず、コミュニティ内を歩き回っているため、最終的に軍やNSAGに騙され、レイプされる者もいるのです」**
> Yong, 23, Cameroon

全体的に、紛争による精神的影響は女の子とユース女性に深刻な影響を及ぼしているようだ。性暴力や望まない妊娠に対する脆弱性が、その影響を一層深刻にしている。また、他のジェンダー的な特性も影響し得る。女の子とユース女性は、精神的ストレスを認めやすく、不安や不眠、落ち込みを打ち明けることを許容しやすいのだろうか。

> **「私たちは、ストレスの影響を受けすぎており、不安を感じ、頭痛がし、あらゆる問題を引き起こしています」**
> Yirlesa、18歳、コロンビア

表4: 紛争による感情の変化の経験

この1年間に経験した紛争により、幸福感に関連して、以下の感情の変化を経験したか	女の子とユース女性		男の子とユース男性		合計	
	人数	%	人数	%	人数	%
不眠	2643	58.40%	2226	51.70%	4869	55.10%
常に不安状態	2610	57.70%	2131	49.30%	4741	53.60%
緊張してリラックスできない	2601	57.40%	2158	50.10%	4759	53.80%
欲求不満	2105	46.50%	1724	39.90%	3829	43.30%
絶望感	2010	44.30%	1659	38.30%	3669	41.40%
集中できない	1927	42.50%	1596	37.00%	3523	39.80%
常に悲しみを感じる	1859	41.00%	1447	33.50%	3306	37.30%
何事にも意欲や興味が湧かない	1695	37.40%	1353	31.40%	3048	34.50%
孤独感	1679	37.10%	1420	33.00%	3099	35.10%
苛立ち	1557	34.40%	1258	29.10%	2815	31.80%
罪悪感	968	21.40%	809	18.70%	1777	20.10%
希死念慮	582	12.90%	457	10.60%	1039	11.80%
その他感情的変化	623	13.80%	482	11.20%	1105	12.50%
合計	4511	100.00%	4302	100.00%	8813	100.00%

ジェンダー的な重大な影響

女の子とユース女性は、男の子やユース男性に比べ、幸福感に大きな影響を受けている。



スーダンのハルツームの紛争から家族とともに逃れた12歳の女の子© Plan International

「もがいている…」

生計と経済的安定

家を追われ、武力紛争による全面的な破壊の混乱の中で、大半の家族の収入は影響を免れない。農作業ができなくなり、他の物資も供給されなくなる。結果としての食料不足は、人びとが飢えるだけでなく、経済全体が縮小することを意味する。たとえお金があったとしても、売るものも買うものもないのだ。

調査参加者の63%超が、生計を立てる能力と家計収入が紛争の影響を中程度～非常に受けていると回答している。収入への影響はスーダンで最も大きく、フィリピンで最も小さい。

基本的なニーズを満たすために用いた様々な戦略について尋ねたところ、大半が次のとおり回答した。

45%
が栄養価の低い食品に頼っている

45.5%
が貯金を取り崩している

45.5%
が食事の量を減らしている

栄養価の低い食品に頼ったり、食事量を減らしたりすることについては、ジェンダーで有意な差が認められ、女の子とユース女性の方が、「食事量が少ない」と答える割合が高かった。

47%の女の子とユース女性、44%の男の子とユース男性が、食べる量を減らしていた。

この調査結果は、他の調査とも一致する。多くの国では、女の子と女性の3人に2人が食事を最後に、最も少なく食べ、世界で極度の飢餓状態にある3億900万人のうち60%が女性と女の子である[58]。食事量の減少と栄養価の低い食品の摂取の増加は、女の子とユース女性に特に重大な影響を及ぼしており、憂慮すべき調査結果である。妊娠中のユース女性は、お腹の子どもと同様に特に影響を受けやすい。

詳細なインタビューでは、経済的な生き残りをかけた苦闘が生々しく語られた。カメルーンのインタビュー回答者は、事業所が焼き討ちに遭い、家族の収入を支えるために、女の子も男の子も見つけられる仕事なら何でもしていた。女の子と女性は主に、可能なときは農業に携わり、食料を販売していた。男の子と男性も農業に従事していたが、より多くの場合、雑多な仕事に就いており、家族の「保護者」や「提供者」として描写されていた。多くのインタビュー回答者は、以前は地元の農業に頼って食料を確保していたが、それはもはや不可能であると語った。

> **「人びとは怖くてもう農場には戻れません…人びとの店は燃やされ、多くの人が逃げ出しました」**
> Bate、22歳、カメルーン

コロンビアでは、家族の収入が途絶えて最も影響を受けたのは避難した家族であり、しばしば親戚からの援助に頼らざるを得ない状況に追い込まれた。回答者の中には、家庭での責任が増えたと話す者もいたが、それは女の子やユース女性に限ったことではなく、全員に共通していた。

> **「男であろうと、物事のやり方を学ばなければなりません…私の家では、皆が責任を負っていると常に教えられました。一人は掃除をし、別の者はモップがけをし、また別の者は台所を手伝うなど、といった具合です」**
> Daniel、19歳、コロンビア

エチオピアのインタビュー回答者は、紛争により高騰した生活費について言及した。

> 「紛争前は物価が安く、生活費は安かったです。でも、物価が高騰してから、人びとは胃腸や精神の不調を訴えるようになりました… 水が手に入る日もありますが、ない日には、放課後に息子に遠くから水を汲んでくるように言います」
> Adolay、20歳、エチオピア

22歳のユース女性、Awashは、食料不足の理由として、農民が自由に移動し、働くことができないこと、そして作物の収穫する多くのユース男性が殺されていることを挙げた。更に、銀行口座へのアクセスが不可能であり、就労者の給与は不定期に支払われている。

> 「私たちは今、毎月給料をもらえず、3か月に1度もらっている状況で、生活が大変です。そして、テフ*やその他の食料品といった基本的な品物の価格が高騰しており、結果、私たちは非常に厳しい状況に置かれています。生き残るのが不可能になりつつあります…」
> Addodas、19歳、エチオピア

無給のケアワークが増えたと感じている女性回答者が複数いた。

> 「男の子と比べて、私たちはほとんどの時間を家の仕事に費やしています。つまり、女の子の負担が大きいのです」
> Dansha、17歳、エチオピア

フィリピンでは、大半の参加者が、収入が紛争の影響を受けたと答えた。他の国々と同様、強制避難により、多くの参加者が土地や生計手段を失った。

> 「銃撃戦がまだなかった頃、父は農場を所有していましたが、紛争が始まると、父の収入源である農場を手放しました」
> Rania、21歳、フィリピン

紛争により、家庭での役割が増えたのは、主にインタビュー回答者が自宅で過ごす時間が長くなったためである。概して、家庭での仕事は主に女性が担った。

> 「この地域の女性は、若くして結婚し、紛争中は子どもや家族全員の世話をすることが彼女たちの役割です」
> Mariam、21歳、フィリピン

男の子や男性は、主に栽培や収穫といった屋外での活動を通じて、家族を養う役割があると考えられていた。しかし、これらの役割が重複することもあり、女の子も収穫を手伝うこともあるし、男の子も家事を手伝うことがあると指摘する参加者もいた。避難場所を含む場所、紛争前の状況、ジェンダーは、個人や家族が貧困の深刻化に対処する方法にそれぞれ異なる影響を与える。女の子やユース女性は食事の量を減らし、多くの場所では家事に追われ、勉強や仕事、新しいスキルの習得といった機会へのアクセスが制限されているという。特にカメルーンでは、男の子やユース男性は、一家の大黒柱と見なされており、家族の収入に対する責任を感じていた。誰もが有給の仕事を求め、可能な限り地元経済を支えようとしていることが、この調査から浮上した重要な優先事項となった。これは次のセクションで概説する調査回答にも反映されている。



ナイジェリアの紛争により避難した若い未亡人と母親が、プラン・インターナショナルの支援を受けて食品事業を立ち上げる© Plan International

* 食用の種子を採るために栽培される愛草の一種

「十分ではありません.」

サービスとリソースへのアクセス

紛争によりアクセスできないが利用したいサービスやリソースについて参加者に尋ねたところ、最も多かった回答は以下の通りである。

47% 経済的支援

39% 雇用支援

37% 教育

33% 食料

32% 医療/医療処置

経済的支援と雇用支援は、誰もが最も重要な問題として挙げた。これは、ユースにとって入手困難な、真に求められる分野である。最も多く報告されたサービスの中で、食料に関する支援だけにジェンダー間の大きな違いが見られた。更に、女の子とユース女性は、精神的・社会的な健康サービスやSRHサービスを利用できないと訴えた割合が、男の子とユース男性よりも高かった。

これらの結果は、サンプル数が少ないものの、以前の調査結果を裏付けるものであり、インタビュー回答者の間でも多くの女の子とユース女性が、性暴力による不安、うつ、身体的・心理社会的苦痛を訴えているという議論がされた。これらサービスに対する満たされない真のニーズが存在しているようであり、特に女の子とユース女性が明確に表明している。地域で最も必要とされていることを尋ねたところ、調査参加者は食料安全保障と基本的なニーズへのアクセスを挙げたが、その他の優先事項についてはジェンダー間で大きな違いが見られた。

男の子とユース男性は、インフラの再建と治安および法執行の強化を、女の子とユース女性よりもはるかに重視しており、一方で、後者は、例えばメンタルヘルスや心理社会的支援、脆弱な人びとの支援など、「感情面および社会面の健康支援とカウンセリングの提供」を、男の子やユース男性よりも重視した。

特にカメルーンでの詳細なインタビューで、回答者は医薬品や医療へのアクセスを主要な課題として挙げた。

> 「ある日、妹が体調を崩したのですが、外出できないほど治安が悪く、病院に連れて行けませんでした。父は彼女を近くの薬局まで背負い、助けを求めなければなりませんでした」
> Makola、19歳、カメルーン

紛争中にIDPとなった参加者と自宅に留まった参加者を比較すると、IDPだった参加者は、食料や生活必需品へのアクセスを優先する傾向が強く、自宅に留まった参加者は、経済復興を優先する傾向が強かった。

本セクションの調査結果は、人口や居住地に応じて的を絞った支援の必要性を明確に示している。ユース女性は食料援助へのアクセスが非常に困難であり、改善が必要であると同時に、彼女たちのメンタルヘルス面にも一層の注意が必要である。難民は、働き、自身を支える意欲はあるものの、他者に大きく依存することになるため、食料安全保障、基本的なニーズ、インフラが極めて重要である。自宅に留まっている者にとっては、地域経済の再建が鍵となる。

表5: 紛争で参加者がアクセスできないリソース/サービス(ジェンダー別)

紛争でアクセスしたいのにできないリソース/サービスはあるか	女の子とユース女性		男の子とユース男性		合計	
	人数	%	人数	%	人数	%
経済的支援(現金給付など)	2307	47.30%	2262	46.70%	**4569**	**47.00%**
雇用支援 [職業訓練/技能訓練/職業紹介サービス/起業家育成など]	1891	38.80%	1874	38.70%	**3765**	**38.70%**
教育	1825	37.50%	1748	36.10%	**3573**	**36.80%**
食料	**1633**	**33.50%**	**1588**	**32.80%**	**3221**	**33.10%**
医療/医療処置	1581	32.40%	1536	31.70%	**3117**	**32.10%**
食料を基盤とする支援 [現金給付/クーポン券等]	1558	32.00%	1437	29.60%	**2995**	**30.80%**
精神的・社会的健康サービス [メンタルヘルス/心理社会的支援等]	1341	27.50%	1179	24.30%	**2520**	**25.90%**
移動手段	1411	29.00%	1423	29.40%	**2834**	**29.20%**
水への確実なアクセス	1238	25.40%	1152	23.80%	**2390**	**24.60%**
警備・保護サービス	1119	23.00%	1077	22.20%	**2196**	**22.60%**
衣類	1045	21.40%	964	19.90%	**2009**	**20.70%**
家庭用品 [家具/キッチン用品等]	936	19.20%	838	17.30%	**1774**	**18.30%**
法的サービスおよび支援 [移民/難民認定手続きの支援/その他]	864	17.70%	844	17.40%	**1708**	**17.60%**
衛生 [設備へのアクセス]	823	16.90%	713	14.70%	**1536**	**15.80%**
SRHサービス	679	13.90%	579	11.90%	**1258**	**12.90%**
必要なサービス/リソースにアクセスできる	255	5.20%	235	4.80%	**490**	**5.00%**
上記に該当なし	598	12.30%	628	13.00%	**1226**	**12.60%**
合計	**4873**	**100.00%**	**4847**	**100.00%**	**9720**	**100.00%**

ジェンダー的な重大な影響

女の子とユース女性は、男の子とユース男性より食料を基盤とする支援へのアクセスが難しいと回答。

「支援が来る時は常に、それを非常に必要としている」

援助機関の役割

サービスやリソースへのアクセスに関する具体的な質問に加え、援助団体から支援を受けたことがあるか、また、支援を受けた場合、その支援は役に立ったかも尋ねた。援助を受けた者はごくわずかであったが、彼らは支援が効果的であったと回答した。

これらの調査結果は、援助機関が最善を尽くしているにもかかわらず、なぜ支援が必要な民間人に支援が届かないのかという原因を示唆するものではない。だが、国際人道法上の義務として、支援が必要な民間人を救済できるよう、妨害のない人道支援の提供が急務であることを示している。

多くの複雑な紛争状況では、援助が困難である。国境でトラックが待機し、武装集団や国内の不必要な官僚的制限により民間人が援助を遮断され、人道支援職員が標的とされ、時には殺害される。

支援が届く場合、81%の回答者が、支援を「ある程度」または「非常に」役立つと感じている。

46% の参加者が、**「支援を受けていない」**と回答。

45%が「ある程度役に立った」、36%が「非常に役に立った」と回答。

IDPや難民である参加者**は、そうでない参加者に比べ、より有益であると感じていた。**

フィリピンの参加者は、受けた支援が最も役に立ったと感じた。



レバノンの避難家族に届けるため援助物資を車に運び入れるプランの職員 © Plan International

4ヵ国全てで、インタビュー回答者は何らかの支援を受けていると答えたが、食料や水等の必需品がしばしば不足していた。エチオピアの参加者は、この結果、避難中と受け入れコミュニティに到着した両方の状況で、「飢えと渇きで命を落とした人もいた」と述べた。

> **「着いてみたら、問題だらけで、水も他の必需品もなくて、水汲み用のバケツさえなく、川から水を汲まなければならないのです」**
> Bagado、17歳、エチオピア

このように、エチオピアでは支援が緊急に必要であるにもかかわらず、支援が不十分だと感じている人が多い。

> **「私たちを助けてくれる組織や、NGOはいません。私の兄弟は、遠くから水を汲んできてくれました。私たちは、疲れた人たちが木陰で休めるよう手助けしました。一度、ヤギを屠殺して、木を燃やして肉を調理しました。私たちはそれを食べただけ、それ以外には何もありません」**
> Aculle、18歳、エチオピア

Addodasが述べるように、妊娠中・授乳中の女性は特に脆弱である。

> **「私たちは飢えと渇きに苦しんでいて、そのため、母乳をあげるのが最も大変な仕事です。それは、私たちが十分に食べないと、子どもにお乳をあげられないからです」**
> Addodas、19歳、エチオピア

> **「私はいつも、こんな風に苦しむくらいなら家で死んだ方がましだと思っていました。紛争から逃れる困難な旅に子どもを連れ出したことで、子どもの健康状態が悪化しました。彼は泣くばかりで、栄養失調で体重も減り、行動も全く変わってしまいました」**
> Addodas、19歳、エチオピア

カメルーンでは、様々な形での支援が届いていた。

> **「食料、水、避難所、医療用品、衣類、それに生存と復興に必要なその他の必需品も」**
> Egbe、16歳、カメルーン

しかし、回答者は、支援は不定期で、しかも少なすぎで遅すぎる場合が多いと述べた。参加者は、援助団体が人びとのニーズに傾聴するよう、一層の努力を求めている。

> **「私たちは政府やNGOに直接会って話すことを求めていますが、大抵の場合、彼らは役人や代表者と会って話すだけです。彼らは私たちに会いに来たり、話し合うことはありません。現在、様々な団体から援助や支援を受けていますが、人数の割に十分ではありません」**
> Tezeke、16歳、エチオピア



ユース女性、エチオピア © Plan International

「私は成功者だと思ってます..」

将来を見据えて

調査参加者が将来を語るとき、多くの子どもとユースが経験してきた紛争と暴力の終結が最大の関心事であった。

全てではないが、彼らの多くは、医者、プロスポーツ選手、教師、弁護士、会計士になるという夢を持ち続けているが、紛争の終結と恒久的な平和の実現が前提である。

優先される平和構築活動は以下の通りである。

63% 和平交渉

59% 停戦

49% 敵対行為阻止のための紛争

回避努力

表6: 平和構築活動に対する参加者の提案(ジェンダー別)

紛争終結のために、あなたの国や地域でどんな平和構築活動が行われるべきだと思うか

	女の子とユース女性		男の子とユース男性		合計	
	人数	%	人数	%	人数	%
和平交渉	3136	64.50%	2983	61.50%	**6119**	**63.00%**
停戦(合意された戦闘停止)	2936	60.40%	2758	56.90%	**5694**	**58.60%**
将来の紛争を防ぐための紛争回避努力	2478	51.00%	2256	46.50%	**4734**	**48.70%**
紛争の根本原因への取り組み [紛争が勃発した理由]	2214	45.60%	2098	43.20%	**4312**	**44.40%**
避難民を含めたコミュニティのユースを和平交渉に参加させる	**2168**	**44.60%**	**1914**	**39.50%**	**4082**	**42.00%**
コミュニティの平和構築活動	2162	44.50%	2041	42.10%	**4203**	**43.30%**
避難民を含めたコミュニティの大人を和平交渉に参加させる	2080	42.80%	1805	37.20%	**3885**	**40.00%**
避難民を含めたコミュニティの女の子とユース女性を和平交渉に参加させる	1894	39.00%	1602	33.00%	**3496**	**36.00%**
上記に該当なし	163	3.40%	238	4.90%	**401**	**4.10%**
合計	**4860**	**100.00%**	**4851**	**100.00%**	**9711**	**100.00%**

ジェンダー的な重大な影響

大半の平和構築活動に、女の子とユース女性の方がより多数賛成し、また、平和会議にユースを参加させることをより強く支持している。

コロンビアのAnaは、犠牲者と共に平和構築に取り組む団体に関わっており、過去の経験が将来の生活を支配することがないよう努めている。

> **「私たちは、被害者がこれ以上権利を侵害されないように努めています」**
> Ana、24歳、コロンビア

詳細なインタビュー回答者は、5〜10年後の自身の姿と、思い描く自分の将来について思いを巡らせるよう求められた。

カメルーンでは、多くの人が将来に絶望しており、参加者は、もはや不可能であるかのように、「なりたかった」という表現で夢を語った。多くの者が、現在進行中の紛争により、目標を変えざるを得なかったことを認めた。

> **「私は2年生で中途退学を強いられ、パイロットになりたかったのに、今では建設現場で肉体労働に従事しています。今はセメントを混ぜたり、ブロックやセメントを運びます。この紛争で、私の夢は潰えてしまいました」**
> Bate、22歳、カメルーン

他の3つの重点国、コロンビア、エチオピア、フィリピンでは、インタビュー回答者は希望と夢を持ち続けようとしていた。

フィリピンでは、大多数が、たとえ状況が劇的に変化しても、紛争が彼らの目標を変更させることはないと答え、全ての不就学者は復学する意思を示した。:

> **「結婚する前から、[学業を修了する]夢は変わりません。それは、両親が経済的に苦しい時期に結婚し、海外にいる兄弟姉妹から、彼らが海外にいる間にそのチャンスを生かすべきだと助言されたからで、それ以上待つと、海外に経済的に支援してくれる人がいなくなるかもしれません」**
> Mahid、18歳、フィリピン



カメルーンの紛争により、娘とともに強制避難した若い母親 © Plan International

> **「子どもがいるので再び学校に通うことはなく、私の目標は変わり、明日がどうなるか分かりません」**
> Yisah、17歳、カメルーン



子どもの教育継続を支援している、臨時学習センター、カボ・デルガード州、モザンビーク
© Plan International

コロンビアの多くのインタビュー回答者が、仕事と私生活の両面で成功を収める人生を思い描いていた。

> **「一人暮らしかパートナーとの同居で、プロフェッショナルとして既に活躍して、車を所有し、母が仕事をしなくてもいいように助ける」**
> Tori、18歳、コロンビア

しかし、かなりの数、参加者の4分の1が、彼らの夢が紛争による影響を受けたと回答した。多くの場合、教育を断念し、夢を先延ばしにせざるを得なくなり、中には精神状態に影響が出たという者もいた。一方で、新しい方向性を見出すことが完全にマイナスではないと考える者もいた。

> **「強制避難ということが、家族のあり方や人生の他の側面、他の経済的選択肢など、多くのことを考え直すきっかけになったことは確かです。しかし、当時は本当に苦しみました」**
> Daniel、19歳、コロンビア

インタビュー回答者の中には、自身の住む町について、ユースに教育と雇用機会が与えられ、平和で静かな場所といった、現在とまったく違う未来を思い描く者もいた。

エチオピアの参加者は、将来や個人的な目標について話し合う中で、平和の重要性、教育への復帰、家族との再会、帰郷、キャリア目標の実現について言及した。

> **「もし平和が未来永劫続けば、私たちは何事もなく、働き、生活を送れると信じています…紛争には破壊と苦しみ以外の価値はありません…なので、平和こそが世界で最も素晴らしく、共に守っていきましょうと言いたいです」**
> Addi、23歳、エチオピア



ティグレ州の難民キャンプにある、子どもに優しいスペースを利用する男の子
© Plan International

> **「将来のために、学業を修了・卒業したいです。そして、仕事で成功し、家族や社会に貢献したいです」**
> Baraulo、20歳、エチオピア

多くは依然、高い志を失わず、医師、教師、エンジニア、パイロット、美容師になることや、金融業界で働くことを希望している。平和と和解は、平穏な生活を取り戻すために必要な基盤であるとよく評され、そうして初めて、教育を受け、キャリアの機会を得られる安定した社会に落ち着くことができる。

> **「和解は幸福と団結をもたらすでしょう。でも、もしそれに失敗したら、何も改善されません」**
> Adola、16歳、エチオピア


難民キャンプで学ぶ女の子、カメルーン © Plan International

エチオピアの参加者は、特に紛争が女の子とユース女性に性暴力という形で与える影響について懸念した。

> **「いつか結婚して両親を喜ばせたいという夢がありましたが、今は父親がわからない子どもを育てています。また、大学を卒業して、就職して充実した人生を夢見ていました。でも、今は何もかもが台無しです…」**
> Tigray、18歳、エチオピア

Mille(13歳)とAculle(18歳)は、将来、女の子と女性が追加の支援と保護を受けられることを望んでいると述べた。二人は、女の子とユース女性の権利に対する認識を高めることを決意している。

> **「女の子が多くの困難に苦しんでおり、支援が不可欠であり、彼女たちの権利が尊重されなければならないと思います…私は、レイプされた女の子を目撃したことがあり、ジェンダー平等に関する啓発活動に携わりたいです。そのような女の子には、法的プロセスや女性問題の事務所に相談することの価値を教えたいです。また、そのような事件に関わった人物は、その行動に説明責任を追及され、他の人がそこから学ぶべきだと信じています」**
> Mille、13歳、エチオピア

Aculleは、女性と女の子を虐待から守ることを最優先事項とすべきだと考えている。人びとは女性を守るための教育を受けるべきであり、それは皆の責任である。

> **「将来は、医療関係の分野で学び、女性に関わる仕事をしたいと思っています。今後は、私たちが経験したことを他の女の子や女性が経験することがあってはなりません。私たちが経験したことは本当にとても辛いものでした」**
> Aculle、18歳、エチオピア

4ヵ国全てのインタビュー回答者は、紛争終結と、恒久的な平和の構築方法について議論した。彼らの提案は、調査回答者の反応と非常に一致している。紛争当事者間の対話が肝要であると見なされた。

> **「多くの苦難を経験してきた、この地域に平和を取り戻すためには、当事者同士が話し合いの場を持つべきです」**
> Nain、15歳、カメルーン

だが、コロンビアのインタビュー回答者は、和平交渉に対して複雑な感情を抱いており、懐疑的な意見もあった。

> **「実際は少し難しいのです…和平合意が結ばれると言われても、そこでは常に何かについて意見が対立し、それが更なる紛争を招くのです。結局はいつも同じ結末を迎えるのです」**
> Raquel、22歳、コロンビア

多くの参加者は、ユースを参加させるべきだと強く感じていた。

> **「そうよ! 未来は彼らの手中にあるし、彼らは先導者なのよ」**
> Yisah、17歳、カメルーン

コロンビアのDanielは、ユースが興味や能力を生かして、自治体やコミュニティレベルで重要な役割を果たせると考えている。

> **「でも、私は、政治や社会的な提唱活動、市民活動といった分野で、ユースが平和を築くこともできると信じています。ただし、権利、提唱活動の仕組み、市民による監視、自己防衛の体制についてユースを訓練する必要があると思います。また、文化やスポーツから、ユースが彼らのやり方で平和を築くための小さな取り組みも、何らかの形で必要だと思います…」**
> Daniel、19歳、コロンビア

4ヵ国全ての参加者は、平和構築には、ユースの教育や経済的な機会を支援し、多くの参加者が強調したように、精神的健康のサポートを含む重要なサービスを再建することが必要であると認識していた。それができて初めて、彼らは未来と自身の異なる人生を思い描くことができるのだ。

紛争解決には、政府や国際機関、そしてユース自身による生活再建のための具体的な行動が伴う必要がある。

> **「家には何も残っていないことを強調します。私は紛争後一度戻ったことがありますが、家は完全に破壊されていました。ですから、電気と水道が復旧した状態で家に戻りたいとだけ伝えたいのです」**
> Tsebri、18歳、エチオピア

> **「自分の町で生き延びた人びとがいて、彼らはその紛争が何であるかを知っていて、高齢者や当事者でない人びとに異なる視点を提供できるのです」**
> Valentina、22歳、コロンビア


レバノンの避難民用シェルターにいる8歳の女の子 © Plan International

結論

本調査は、武力紛争や暴力に囲まれて暮らすことの悲惨な影響を、生々しい詳細とともに明確に示している。

紛争は人を殺し、生き残った多くの人に永続的な傷を残し、子ども時代を台無しにする。ユースは想像を絶する恐怖と常に隣り合わせで生きていると語る。彼らの親は目の前で殺され、彼らは家を去り、武装集団が街を支配し、女の子とユース女性はレイプや虐待を受け、ユース男性は戦いに駆り出される。少年も虐待を受け、ユース女性も戦う場合もあるが。

暴力が常態化する：外出も就学もできず、雇用機会が失われ、貧困と飢餓が更なる暴力と一層有害な対処戦略を助長する。

夢はしぼんでいく：ユース男性は、金銭や保護を求めて武装集団に加わる可能性がある; 子どもは、強制的に徴用、誘拐、その他深刻な侵害の被害者となり得る; 女の子は、自身や家族を支えるために、早すぎる結婚を強いられる可能性がある。

女の子とユースの生活は、明らかに自国の危機によって形作られている。暴力は身体的・精神的に傷跡を残す: 教育や医療サービスの欠如、食料や水の不足、技能訓練の欠如、そして安全な生計手段が乏しいことによる影響は、生き残った者全てに将来にわたって影響を及ぼす。この調査では、女の子と男の子、ユース女性とユース男性の経験や、それらの経験に対する対応にも明確な違いがあることが示されている。

当然ながら、調査では深刻な精神的な苦痛が判明した: 睡眠障害や慢性的な不安感、そして助けになり得るメンタルヘルスや SRHR サービスへの制限されたアクセスなど、女の子とユース女性は、精神的な苦痛のサインを、男の子とユース男性よりも訴えている。他方で教育については、今回、男の子とユース男性の方が、女の子とユース女性よりも影響を受けていると回答していた。


全員が教育を享受できている難民キャンプの母親と子どもたち、カメルーン
© Plan International

「今は私が食べ物を探し、家事をしなければならず、それは私にとって容易ではありません…自分の面倒をみなければならず、私を世話してくれる人と強制的に結婚させられ、今妊娠しています」
Bessong、24歳、カメルーン


レバノンでの紛争により避難した家族が暮らす学校© Plan International

「私たちが貴重な時間と人生を費やした教育が無意味になってしまう. . .」
Adoeio、24歳、エチオピア

Makolaの経験は、交差する脆弱性の影響を強調している。家族の収入が減り、通学が危険になり、そして彼は車椅子の利用者である。

「私の学校は遠くにあり、車椅子だけでは通えず、交通費を払わなければなりませんでした。これは両親にとって高額な出費でした。また、銃声が聞こえることもあり、通学が非常に危険で、他の子のように逃げることもできないため、この危機的状況の間は学業を続けられませんでした。そして、ほとんどの時間を家にいることを余儀なくされました」
Makola、19歳、カメルーン

詳細なインタビューでは、多くの者が殺害されたユース男性の数や、彼らがなぜ武装集団に狙われ、最後の手段として武装集団に身を投じたかを考察した。

「選択肢が他にない限り、紛争を愛する人はいないと思います。つまり、女性が、姉妹が、母親がレイプされているのを目撃し、両親が殺され、そして最終的に自分の身の安全のために、紛争に参加するなら…それは紛争が天国だということではありません」
Mekelle、18歳、エチオピア

女の子とユース女性は武装集団に勧誘される可能性は低いものの、レイプを含む絶え間ない性暴力の対象とされ、その結果、妊娠に至ることも多い。

ユース女性は、子どもを連れて故郷に戻った際に、このスティグマが付きまとうと語った。また、紛争下で妊婦がどれほど脆弱であるかも判明した。食料や医療の不足、そして強制避難により、母親と赤ちゃんは死亡したケースもある。


紛争解決プログラムに参加するユース女性、フィリピン
© Plan International / Michael Perfecto


IDPセンターで暮らす子どもたち、ウクライナ
© Plan International / Albina Vinar

女の子と男の子、ユース女性とユース男性は、多くの共通のニーズを抱えているにもかかわらず、紛争を異なる形で経験し、その経験は生涯を通じて影響するだろう。

これまでの経験にもかかわらず、ユースは夢をあきらめていない。学業を続け、仕事を見つけ、人間関係を築き、社会の未来に貢献するという夢を。

> **「自分は成功者だと思っています…自分の家、家族、個人的な物を持つこと。スタジオを持つこと。自分を高めること。そして、自分のビジネスを持つこと」**
> Andrés、21歳、コロンビア

> **「世界で何が起こっているのを理解するために、学校に戻りたい。もっと勉強したいです」**
> Fatima、15歳、フィリピン

この期待が正当化されるためには、平和が優先されなければならない。男の子もユース男性も、女の子もユース女性も(女性の方が人数は多いが)、ユースが平和構築のあらゆる課題に関わる必要があると認識している。

> **「平和は人生で最も重要なものです。平和があってこそ、全てが繁栄するのですから」**
> Korem、18歳、エチオピア

本調査は、紛争の影響を受けた地域に住むユースが、どんな背景をもち、どこの出身でも、共通して抱えている問題と、理解が必要な相違点を反映している。

食料安全保障と生活必需品へのアクセス確保は、雇用機会の創出や経済的安定の構築と同様に、すべての者にとって、最も重要だ。

医療サービスや栄養面のニーズは、女の子とユース女性がより重視しており、一方、男の子とユース男性はインフラの修復や安全の強化をより重視している。

これら全ては重要だが、異なる優先事項を理解し、計画する必要がある。支援が必要な人びとに、必要な時に支援が届いているとは限らない。


南スーダンのトランジットセンターで待機する23歳のスーダン難民
© Plan International / Peter Caton

本報告書では、特に、女の子と男の子、ユース男性とユース女性の経験と対応におけるジェンダー間の差に着目した。一方が他方よりも苦しむのではなく、彼らは異なる形で苦しむのだ。調査結果はまた、紛争中および紛争後の社会再建期において、彼らには異なる形の支援が必要であることを強調している。これらの差異は重要であり、平和構築を支援し、援助が確実に適切かつ効果的に行われるために、理解する必要がある。

社会が紛争から立ち直り、ユースが生き抜いていく中で、彼らは多くを提供できる。紛争は世代全体を蝕むが、適切に支援を受ければ、この世代の知見と活力がコミュニティの存続と再建に役立つだろう。

> **「私の夢はなんだったっけ。学業を終えたかった。自分はまだ若いから、早く結婚したくなかったし、例え適当な年齢でも結婚したくなかったし、今もしたくない。私が望むのは、まず母を助け、弟妹を育てること。彼らの勉強を手助けし、支えたい。それが私の望みです」**
> Dalia、14歳、フィリピン


IDPキャンプの女性たち、ナイジェリア
© Plan International

多くのユースが、教育のためだけでなく、経済の再建や雇用機会の創出等、多くのユースがギャングに所属したり、早すぎる結婚をしたり、生き延びるために違法行為に手を染めるのを防ぐために、経済的支援の重要性を指摘した。

提言

以下の提言は、本調査に参加した女の子とユースの洞察に基づいて策定された。

これらは、資金調達を管理する権力者に対し、子どもの保護、生計と経済的安定、教育、健康と栄養(メンタルヘルスと心理社会的支援を含む)、平和構築という、ユースの優先事項を重視するよう求めている。

紛争に巻き込まれた人びとが生き延び、生活とコミュニティを再建するための道筋を示している。



ウクライナ国内の紛争で避難し、里親の元で暮らす女の子
© Plan International / Albina Vinar

紛争当事者(軍隊およびNSAGを含む)は

子どもと民間人を守ること

子どもや民間人を標的にし、殺害・虐待することをやめること。子どもに対する深刻な侵害行為を全てやめよ: 徴用、殺傷、性暴力、学校や病院への襲撃、誘拐、人道支援へのアクセス妨害。軍や武装集団に徴用された子どもを特定し、保護・リハビリのために子ども保護アクターに解放すること。

国際人道法の尊重

支援を必要としている民間人が、人道支援や保護を妨げられることなく受けられるようにすること。国際人道法を遵守し、援助要員を保護し、支援を必要する人びとへの迅速なアクセスを保証する。

停戦と平和の実現

即時かつ持続的な停戦を実施せよ。恒久的な平和を目的とした有意義な和平交渉を開始せよ。子どもの徴用と利用をやめることを交渉で優先すること。

国連安全保障理事会および全加盟国は

全般

民間人、特に子どもに対するあらゆる侵害や虐待を明確に非難すること。子どもと武力紛争に関する行動計画の実施と展開を求め、侵害者に対する説明責任を徹底すること。紛争におけるSGBVを即時根絶するための措置を講じるよう促すこと。平和のための包摂的な対話を奨励し、全ての人の尊厳・教育・生計を確保するべく、根本原因に対処すること。

人道支援セクターは



全般

子どもに緊急支援と必須サービス(食料、水、避難所、医療、教育、心理社会的支援を含む)を提供すること。同伴者のいない子どもや虐待のサバイバーである子ども、若い母親など、支援が届きにくく、脆弱な集団を尊厳を以て支援すること。平和構築、交渉、人道支援に子どもやユース、特に女の子やユース女性を含めること。



子どもの保護

「保護の中心性」の原則の下、人道的対応において、子どもの保護が戦略的目標かつ集団的結果となるようにする。特に子どもの徴用やSGBVを含む、紛争に関連する子どもの保護リスクの回避と対応を優先すること。子どもと思春期の女の子に対応した事例管理を提唱すること。基本サービスパッケージの一部として、メンタルヘルスおよび心理社会的支援サービスと包括的な社会復帰支援を行うこと。



教育

危機的状況下では、紛争を考慮したジェンダーに配慮した教育を優先すること。教育を襲撃から守るための安全な学校宣言を提唱すること。不就学の思春期の若者やユース、IDP、難民、脆弱な集団に対して、柔軟な非公式教育を提供すること。学校への安全な送迎、心理社会的支援、学校給食の提供などを通じて、学習者と教師の安全と幸福を確保すること。



健康、栄養、心理社会的支援

移動型の医療と栄養サービス(一次医療、SRH、メンタルヘルス、心理社会的支援を含む)を医療過疎地域で提供すること。5歳未満の子ども、妊娠・授乳中の女の子や女性に対する栄養失調予防活動と重度の急性栄養失調治療を優先すること。紛争地域や難民・IDPキャンプにおいて、6~12か月分の安定した栄養供給を確保すること。



現金およびクーポン給付 / 食料安全保障 / 生計

食料不安や、子どもやユースに対するCAAFAGやSGBVといった子どもの保護リスクの経済的要因に対処するために、複数セクター対応計画において戦略的に現金およびクーポン給付支援を行うこと。

各国政府および地方自治体は



アクセス

国際人道法を遵守すること。紛争の影響を受けた人びとが適切な人道支援および必須サービスを適時利用できるよう、国内の法的な仕組みや政策を推進すること。人道支援従事者および支援物資の円滑な移動を可能にすること。特別なニーズを持つ子ども、女の子、障害児、トランスジェンダーの子どもやユースの移動の妨げや制限に対処すること。



子どもの保護

人道支援アクターと協力し、子どもに対する6つの深刻な侵害を防止・保護・報告・対応するための取り組みを支援すること。国家機関(警察や軍隊を含む)による性的搾取や虐待から子どもや民間人を保護し、特に女の子とユース女性が直面するリスクに注意を払うこと。SGBVや性的搾取・虐待を防止するためのプロトコル・政策・法律を統合し、資金を割り当てること。法的・司法的措置を可能にすること。



教育

紛争の影響を受けた思春期の若者とユースに対し、加速教育、中等教育、職業訓練の道を含む認定教育の提供を優先すること。誰もが教育を享受できるようにすること。教育を襲撃から守るための国家政策を策定し、平和教育を組み込んで社会の結束とレジリエンスを強化すること。避難した子どもとユースがより良い未来を築くために教育を継続できるよう支援すること。



健康、栄養、心理社会的支援サービス

思春期の女の子とユース女性に特に注意を払いつつ、子どもとユースに対する一次医療、栄養、SRH、メンタルヘルスおよび心理社会的支援を拡大すること。アクセスが困難な地域には移動チームを活用すること。栄養、保健システムの強化、研修、安全な移動、年齢別のジェンダー平等への取り組みの統合に優先的に資金を提供すること。



現金およびクーポン給付 / 食料安全保障 / 生計

子どもとユースの優先的なニーズを満たすために、子どもの保護、教育、食料安全保障、栄養、生計、社会的安全網の統合プログラムにおいて、現金およびクーポン給付を活用すること。女の子と女性を優先すること。人道支援が適時に、かつ費用対効果の高い方法で提供されるよう、地元の食料・栄養サプライチェーンと地元の食料生産者を促進・保護すること。

ドナーは

教育

紛争時に教育が不可欠であることを認識すること。人道支援の4%にあたる資金調達を可能にし、Global Education Firstの目標を達成すること。思春期の若者とユースの教育、安全な学校宣言の実施、襲撃から教育を守る対策に十分な資金を提供すること。平和と和解の取り組みにおいて教育を優先すること。ジェンダー平等、社会の結束、平和、寛容を促進する紛争を考慮した投資を支援すること。

子どもの保護

紛争により深刻化した子どもの保護リスク(子どもの徴用やSGBVを含む)を防止・対応するための、ジェンダーおよび年齢に配慮した戦略を講じる柔軟な複数年プログラムに資金を提供すること。子どもに対する犯罪、子どもの権利侵害、武力紛争における子どもに関する監視・報告制度に焦点を当てた説明責任制度の確立に資金を提供すること。

現金およびクーポン給付 / 食料安全保障 / 生計

特に女の子とユース女性に配慮し、子ども、ユース、その家族の経済的安定と回復を支援するプログラムに柔軟な資金を提供すること。食料不安地域における飢餓の防止、レジリエンスの構築、子どもとユースの幸福の支援を目的とした食料安全保障への資金提供を増やすこと。効果を高めるために、地元に合わせた調査と革新的な取り組みに投資すること。

健康、栄養、心理社会的支援サービス

女性スタッフの採用を優先し、緊急医療と心理社会的支援に資金援助を行うこと。普遍的な医療へのアクセスと健康危機への迅速な対応のために柔軟な資金援助を行うこと。地元の医療システム、インフラ、危機対応訓練に投資すること。ジェンダーに配慮した栄養に関する取り組みに資金援助すること。緊急時の妊婦と乳幼児の栄養状態を改善し、現金給付や社会保護プログラムと統合すること。

紛争によりスーダンで子どもと引き離され、難民となった女性 © Plan International / Peter Caton

注釈

1 OCHA (2024) Cameroon: North-West and South-West - Situation Report No. 65 (May 2024). https://reliefweb.int/report/cameroon/cameroon-north-west-and-south-west-situation-report-no-65-may-2024 にて入手可能。アクセス日: 09/08/2024

2 Plan International (2024) Neglected Crisis Advocacy Brief – July 2024. https://plan-international.org/un/publications/neglected-crisis-advocacy-brief-july-2024/ にて入手可能。アクセス日:15/07/2024

3 Norwegian Refugee Council (2023) The world's most neglected displacement crises 2023. www.nrc.no/globalassets/pdf/reports/neglected-2023/the-worlds-most-neglected-displacement-crises-2023 にて入手可能。アクセス日:09/08/2024

4 OCHA (2024) Informe Tendencias e Impacto Humanitario en Colombia 2023 | Fecha de corte: Enero - Diciembre de 2023. https://www.unocha.org/publications/report/colombia/informe-tendencias-e-impacto-humanitario-en-colombia-2023-fecha-de-corte-enero-diciembre-de-2023-fecha-de-publicacion-13-de-febrero-de-2024 にて入手可能。アクセス日:09/08/2024

5 Obermeier, A. and Rustad, S. (2023) Conflict Trends: A Global Overview, 1946-2022, PRIO. https://www.prio.org/publications/13513 にて入手可能。アクセス日: 09/08/2024

6 Nyssen, J. (2023) Documenting the civilian victims of the Tigray war (Conference Presentation), Royal Holloway University of London. https://www. researchgate.net/publication/367272415_Documenting_the_civilian_victims_of_the_Tigray_war にて入手可能。アクセス日: 22/05/2024

7 Fisseha, G. et al (2023) War-related sexual and gender-based violence in Tigray, Northern Ethiopia: a community-based study, BMJ Global Health, 8:7. gh.bmj.com/content/8/7/e010270?rss=1 にて入手可能。アクセス日:23/07/2024

8 International Crisis Group (2023). Ethiopia's Ominous New War in Amhara. https://www.crisisgroup.org/africa/horn-africa/ethiopia/b194-ethiopias-ominous-new-war-amhara にて入手可能。アクセス日:21/06/2024

9 ICRC (1999) Country Report Lebanon, People on War. https://www.icrc. org/sites/default/files/external/doc/en/assets/files/other/lebanon.pdf にて入手可能。アクセス日:16/08/2024

10 OCHA (2024) Lebanon: Flash Update #24 - Escalation of hostilities in South Lebanon, as of 08 August 2024. https://www.unocha.org/publications/report/lebanon/lebanon-flash-update-24-escalation-hostilities-south-lebanon-08-august-2024 にて入手可能。アクセス日:16/08/2024

11 UNICEF (2024) Geneva Palais briefing note: Caught in the Crossfire – Lebanon's children under fire. 30 April 2024. https://www.unicef.org/press-releases/geneva-palais-briefing-note-caught-crossfire-lebanons-children-under-fire にて入手可能。アクセス日:22/07/2024

12 Secretary- General UN (2024) Annual Report of the United Nations Secretary-General on Children and Armed Conflict 2024. https://childrenandarmedconflict.un.org/document/secretary-general-annual-report-on-children-and-armed-conflict-3/ にて入手可能。アクセス日:09/08/2024

13 Operational Data Portal (2024) Mozambique. https://data.unhcr.org/en/country/moz にて入手可能。アクセス日: 09/08/2024

14 Medecins Sans Frontieres (2024) Violence continues to displace and traumatise thousands in Cabo Delgado. www.msf.org/mozambique-violence-continues-displace-and-traumatise-thousands-cabo-delgado にて入手可能。アクセス日:24/05/2024

15 OCHA (2024) Nigeria: Situation Report. 5 April 2024. reports.unocha.org/en/country/nigeria/ にて入手可能。アクセス日: 23/07/2024

16 HRW (2024) Women's and Girl's Rights. Nigeria. https://www.hrw. org/world-report/2024/country-chapters/nigeria#5abc38 にて入手可能。アクセス日: 22/07/2024

17 OCHA (2024). Sudan Humanitarian Update. https://www.unocha. org/publications/report/sudan/sudan-humanitarian-update-15-may-2024-enar にて入手可能。アクセス日:02/08/2024

18 Lodhi, A. (2024) After a year of war in Sudan, what is the situation now? Al Jazeera. 11 April 2024. https://www.aljazeera.com/news/2024/4/11/why-did-war-break-out-in-sudan-a-year-ago-where-does-it-currently-stand にて入手可能。アクセス日:29/05/2024

19 OCHA (2024) Sudan: Nine months of conflict, Key Facts and Figures. reports.unocha.org/en/country/sudan/card/546bR0X6yh/ にて入手可能。アクセス日: 16/07/20244

20 Solidatitat (n.d) El Conflicto de Filipinas. www.solidaritat.ub.edu/observatori/esp/dossiers/filipinas/filipinas.htm にて入手可能。アクセス日:12/06/2024

21 UN Women (2017). In Philippines, climate change and conflict both conspire against rural women. wrd.unwomen.org/explore/insights/philippines-climate-change-and-conflict-both-conspire-against-rural-women にて入手可能。アクセス日:23/07/2024

22 UNICEF (2022). One hundred days of war in Ukraine have left 5.2 million children in need of humanitarian assistance. www.unicef.org/press-releases/one-hundred-days-war-ukraine-have-left-52-million-children-need-humanitarian にて入手可能。アクセス日:09/08/2024

23 UNHCR (2024). Ukraine. www.unhcr.org/uk/countries/ukraine にて入手可能。アクセス日:23/07/2024

24 Plan International (2024). Adolescent Girls in Crisis: Voices from Ukraine, Poland and Romania. https://plan-international.org/uploads/2024/05/AGiC-Ukraine_Research-Report-English-Final.pdf にて入手可能。アクセス日:09/08/2024

25 Ibid.

26 OCHA (2024) Global Humanitarian Overview 2024. https://www.unocha. org/publications/report/world/global-humanitarian-overview-2024-may-update-snapshot-31-may-2024#:~:text=The%202024%20Global%20Humanitarian%20Overview,%2446.4%20billion%20to%20-%2448.6%20billion にて入手可能。アクセス日: 09/08/2024

27 Independent International Commission of Inquiry (2024) Detailed findings on attacks carried out on and after 7 October 2023 in Israel. https://www.ohchr. org/sites/default/files/documents/hrbodies/hrcouncil/sessions-regular/session56/a-hrc-56-crp-3.pdf にて入手可能。アクセス日: 09/08/2024

28 OHCHR (2024) Gaza: Turk pleads for end to fighting as death toll passes 40,000. https://www.ohchr.org/en/statements-and-speeches/2024/08/gaza-turk-pleads-end-fighting-death-toll-passes-40000 にて入手可能。アクセス日:16/08/2024

29 Save the Children (2024). Gaza's missing children: over 20,000 children estimated to be lost, disappeared, detained, buried under the rubble or in mass graves. https://www.savethechildren.org.uk/news/media-centre/press-releases/over-20000-children-estimated-to-be-lost-in-gaza にて入手可能。アクセス日: 23/07/2024

30 OCHA (2024) Humanitarian Situation Update #202 | Gaza Strip. https://www.ochaopt.org/content/humanitarian-situation-update-202-gaza-strip にて入手可能。アクセス日:12/08/2024

31 OCHA (2024). Reported impact snapshot | Gaza Strip. www.ochaopt.org/content/reported-impact-snapshot-gaza-strip-17-july-2024 にて入手可能。アクセス日:19/07/2024

32 Save the Children (2024). Gaza's missing children: over 20,000 children estimated to be lost, disappeared, detained, buried under the rubble or in mass graves. https://www.savethechildren.org.uk/news/media-centre/press-releases/over-20000-children-estimated-to-be-lost-in-gaza にて入手可能。アクセス日: 23/07/2024

33 OHCHR (2024). Detention in the context of the escalation of hostilities in Gaza. 20240731-Thematic-report-Detention-context-Gaza-hostilities.pdf (ohchr.org) にて入手可能。アクセス日:09/08/2024

34 International Rescue Committee (2024) Crisis in Palestine: What you need to know. https://www.rescue.org/article/crisis-palestine-what-you-need-know にて入手可能。アクセス日:29/05/2024

35 United Nations Population Fund (2024) Occupied Palestinian territory. https://www.unfpa.org/occupied-palestinian-territory#:~:text=The%20scale%20and%20speed%20of,down%20on%20Palestinians%20in%20Gaza にて入手可能。アクセス日: 25/05/2024

36 International Rescue Committee (2024) Crisis in Palestine: What you need to know. https://www.rescue.org/article/crisis-palestine-what-you-need-know にて入手可能。アクセス日:29/05/2024

37 Independent International Commission of Inquiry (2024) Detailed findings on attacks carried out on and after 7 October 2023 in Israel. https://www.ohchr.org/sites/default/files/documents/hrbodies/hrcouncil/sessions-regular/session56/a-hrc-56-crp-3.pdf にて入手可能。アクセス日:09/08/2024

38 ReliefWeb (2024). Gaza Humanitarian Snapshot #2: 13 - 29 July 2024 - occupied Palestinian territory. https://reliefweb.int/report/occupied-palestinian-territory/gaza-humanitarian-snapshot-2-13-29-july-2024 にて入手可能。アクセス日:09/08/2024

39 Oxfam International (2024) Daily death rate in Gaza higher than any other major 21st Century conflict – Oxfam. https://www.oxfam.org/en/press-releases/daily-death-rate-gaza-higher-any-other-major-21st-century-conflict-oxfam にて入手可能。アクセス日:29/05/2024

40 Bond (2024) The forgotten women and girls in Gaza: A sexual and reproductive health catastrophe. https://www.bond.org.uk/news/2024/02/the-forgotten-women-and-girls-in-gaza-a-sexual-and-reproductive-health-catastrophe/ にて入手可能。アクセス日:25/05/2024

41 IPC (2024). GAZA STRIP: Risk of Famine as 495,000 people face catastrophic acute food insecurity. www.ipcinfo.org/ipcinfo-website/countries-in-focus-archive/issue-105/en/ にて入手可能。アクセス日:09/08/2024

42 Plan International (2024) Giving Gaza's children a last chance. https://plan-international.org/blog/2024/04/11/giving-gazas-children-a-last-chance/ にて入手可能。アクセス日:29/05/2024

43 UN News (2024). Gaza: Number of children killed higher than from four years of world conflict. https://news.un.org/en/story/2024/03/1147512 にて入手可能。アクセス日:09/08/2024

44 Medecins Sans Frontieres (2024) MSF briefing on Gaza to UN Security Council. www.msf.org/msf-briefing-gaza-un-security-council にて入手可能。アクセス日:29/05/2024

45 Mohamed Taha, A. et al (2024) Addressing the mental health crisis among children in Gaza, The Lancet Psychiatry, 11:4. https://www.thelancet.com/journals/lanpsy/article/PIIS2215-0366(24)00036-1/fulltext にて入手可能。アクセス日:29/05/2024

46 Save the Children (2024). Countries in Conflict: The Worst Place to be a child. https://www.savethechildren.org/us/charity-stories/worst-conflict-affected-countries-to-be-a-child にて入手可能。アクセス日:02/06/2024

47 International Review of the Red Cross (2019) 'Children and war, 101 (911), 481–506. Living through war: Mental health of children and youth in conflict-affected areas | International Review of the Red Cross (icrc.org) にて入手可能。アクセス日:04/06/2024

48 The Alliance for Child Protection in Humanitarian Action (2023), The Unprotected: Overview of the Impact of Humanitarian Crises on Children in 2023, The Unprotected: Overview of the Impact of Humanitarian Crises on Children in 2023 | Alliance CHPA (alliancecpha.org) にて入手可能。アクセス日: 03/06/2024

49 UNICEF (2024). Gender equality. www.unicef.org/gender-equality にて入手可能。アクセス日: 09/08/2024

50 ICRC (2018) Masculinity and war- let's talk about it. blogs.icrc.org/law-and-policy/2018/03/15/masculinity-and-war-let-s-talk-about-it-more/ にて入手可能。アクセス日:05/08/2024

51 Wood, R.M., and Thomas, J.L. (2019) The Women in Armed Rebellion Dataset (WARD). oxfordre.com/internationalstudies/display/10.1093/ にて入手可能。アクセス日:26/06/2024

52 Operational Data Portal (2024) Mozambique. https://data.unhcr.org/en/country/moz にて入手可能。アクセス日:09/08/2024

53 UNICEF (2024) Amid escalating violence in Mozambique, 60,000 children displaced within a month. https://www.unicef.org/mozambique/en/press-releases/amid-escalating-violence-mozambique-60000-children-displaced-within-month にて入手可能。アクセス日:09/08/2024

54 Office of the Special Representative for Children and Armed Conflict (n.d.) The Six Grave Violations. https://childrenandarmedconflict.un.org/six-grave-violations/ にて入手可能。アクセス日:09/08/2024

55 Diwakar, V. (2023). Conflict Trajectories and Education: Gender-Disaggregated Evidence from India. Defence and Peace Economics, 35(3), 320–338. https://doi.org/10.1080/10242694.2023.2164913 にて入手可能。アクセス日:16/07/2024

56 Norwegian Refugee Council (2024) Lost Opportunity - Education for out-of-school youth in emergency and protracted crisis settings. https://www.nrc.no/resources/reports/lost-opportunity/ にて入手可能。アクセス日:17/07/2024

57 Frounfelker, R.L. et al (2019) 'Living through war: Mental health of children and youth in conflict-affected areas', in 'Children and War', International Review of the Red Cross, 101:911, pp.481-506

58 UN World Food Programme (2024) Gender Inequality- Women are Hungrier. www.wfpusa.org/drivers-of-hunger/gender-inequality/ にて入手可能。アクセス日: 24/06/2024

謝辞

何よりもまず、本調査の一環として、紛争下での生活について見解や経験を共有してくれた全ての子どもとユースに感謝したい。彼らの時間と洞察に感謝する。

本調査は、プラン・インターナショナルによって実施された。特に以下の者に謝意を表する。

報告チーム: Sharon Goulds、主筆兼報告書執筆者。

元報告執筆者: Isobel Fergus、Dr Martha Lucia Borras Guevara、Aisling Corr、Maite Sagastizabal、Dr Keya Khandaker(主執筆者)、Dr Kit Catterson、Dr Lucia Rost(協力執筆者)。

プラン・インターナショナル編集委員会: Isobel Fergus；上級調査マネージャー兼報告書プロジェクトマネージャー、Dr Keya Khandaker；暫定調査マネージャー兼報告書プロジェクトマネージャー、Dr Jacqueline Gallinetti；監視・評価・研究・学習部長、Lindsey Hutchison；国際人道政策・提唱・外交ユニット長、Anna MacSwan；グローバルメディア・広報部門長、Zoe Birchall；グローバルキャンペーンリーダー、Anita Queirazza；人道支援活動における国際子ども保護部門長、Emilia Sorrentino；緊急時の教育グローバルリーダー、Robin Knowles；グローバルメディアマネージャー、Danny Plunkett；コンテンツ・クリエイティブ部門長。

本報告書に対する貴重なご意見と洞察をいただいた以下の皆様に深く感謝する。

各国事務所および各国組織チーム: 質的調査の実施に協力してくれたプラン・インターナショナル・カメルーン/コロンビア/エチオピア/フィリピンの各事務所の職員、および本報告書に意見を提供してくれた全ての国別および各国事務所に感謝する。

プラン・インターナショナル・グローバル・ハブ: Carla Jones;コミュニケーション担当部長、Kathleen Sherwin; 最高戦略・関与責任者、Damien Queally; 最高プログラム責任者、Dr Lucia Rost; 調査部長、Ifigeneia Kamarotou; グローバル・キャンペーン・オフィサー、Lotte Claessens; 緊急時の子どもの保護上級スペシャリスト、Dr Unni Krishnan; グローバル人道支援部長。

プラン・インターナショナル ROA: Luisa Fernanda Barajas Garcia、人道保護・提唱アドバイザー。

プラン・インターナショナル国連連絡事務所 ジュネーブ: Enzo Tablet Cruz、強制避難政策兼提唱アドバイザー。

プラン・インターナショナル国連連絡事務所 ニューヨーク: Mohamed Djingo、平和と安全保障政策兼提唱アドバイザー。

追加寄稿者: 本報告書の序文を執筆し、ご自身の経験と洞察を共有してくださったFatimaとDr. Elzahra Mohammedに特に感謝したい。

質的データコーダー: Isobel Fergus、Aisling Corr、Maite Sagastizabal。

ドナー: スーダンでの調査は、一部、Adyenとオランダ外務省の資金提供を受け、プラン・インターナショナル・オランダの委託により実施された。

Co-funded by European Union Humanitarian Aid

意見や見解はあくまでも執筆者個人のものであり、EUまたはDG ECHOの意見を反映してものではない。EUも助成金交付機関も、それらに対する責任を負うことはできない。

調査: Geopoll

デザイン: Doodlio Studio



学校に設置された仮設の学習スペースに椅子を運ぶ女の子たち、モザンビーク © Plan International

Until we are all equal

プラン・インターナショナルについて

プラン・インターナショナルは、子どもの権利と女の子の平等を推進する独立した開発・人道団体である。私たちは、すべての子どものカと可能性を信じているが、それが貧困、暴力、排除、差別によってしばしば抑圧されていることを知っている。そして、その影響を最も受けているのは女の子なのだ。

子ども、ユース、支援者、パートナーとともに、私たちは公正な世界を目指し、女の子や脆弱な子どもが直面する課題の根本原因に取り組んでいる。私たちは、子どもが生まれてから大人になるまで、彼らの権利を支援し、子どもが危機や逆境に備え・対応できるようにする。私たちの広がり、経験、知識を活用し、地域、国、そして世界レベルで実践と政策の変革を推進する。

85年以上にわたり、私たちは80ヵ国超で全ての子どもの生活を変えるために、決意ある楽観主義者を結集してきた。

皆が平等になるまで、私たちは止まらない。

2024年発行。文章 © Plan International

Plan International
Global Hub
Dukes Court, Duke Street, Woking,
Surrey GU21 5BH, United Kingdom

Tel: +44 (0) 1483 755155
Fax: +44 (0) 1483 756505
E-mail: info@plan-international.org

plan-international.org
facebook.com/planinternational
twitter.com/planglobal
instagram.com/planinternational
linkedin.com/company/plan-international
youtube.com/user/planinternationaltv